

平成 30 年度

愛知県埋蔵文化財センター

年報

2019

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

目 次

I. 平成30年度事業概要	1
調査の理由と工程	2
平成30年度調査遺跡位置図	4
II. 遺跡調査の概要	7
稲沢市 北丹波・東流遺跡(本発掘調査B)	8
一色青海遺跡(本発掘調査B)	12
清須市 清洲城下町遺跡(本発掘調査B)	20
豊田市 牛寺遺跡(本発掘調査B)	26
安城市 下懸遺跡(本発掘調査B)	28
設楽町 滝瀬遺跡(本発掘調査B)	30
石原遺跡(本発掘調査B)	40
ハラビ平遺跡(本発掘調査A)	47
中村遺跡(本発掘調査A)	49
III. 刊行報告書抄録	51
第211集 西地・東地遺跡	52
第212集 岡山南遺跡	54
IV. 普及・公開活動の記録	57
平成30年度埋蔵文化財展等の活動について	58
連続歴史講座	63
歴史講座「発掘された西三河の城」	64
バックヤードツアーと考古学体験	65
第7回 考古学セミナー「あいちの考古学2018」の記録	66
V. 埋蔵文化財センターの活動	69
資料の貸出・提供	70
ホームページ	71
その他の普及活動	72
地元説明会・遺跡報告会・報告書作成および発掘調査現場における遺構・遺物の指導	74
平成30年度愛知県埋蔵文化財センター組織一覧	75

I. 平成 30 年度事業概要

調査の理由と工程

1. 発掘調査

事業主体		事業名	遺跡名	調査面積 (㎡)	調査期間	調査担当
県建設部 都市整備課	一宮 建設事務所	街路改良工事 (都)名古屋岐阜線	北丹波・東流遺跡	630	平成30年6月 ～平成30年8月	酒井・永井宏
県建設部 下水道課	一宮 建設事務所	日光川上流流域 下水道事業	一色青海遺跡	1,300	平成30年6月 ～平成30年10月	酒井・鈴木恵
県建設部 河川課	尾張 建設事務所	総合治水対策 特定河川事業	清洲城下町遺跡	1,280	平成30年6月 ～平成30年10月	酒井・蔭山
国土交通省 中部地方整備局	豊橋 河川事務所	矢作川 河川改修事業	牛寺遺跡	800	平成30年12月 ～平成31年2月	酒井・鈴木恵
県建設部 河川課	知立 建設事務所	中小河川改良事業 (鹿乗川)	下懸遺跡	900	平成30年11月 ～平成31年2月	酒井
国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	滝瀬遺跡	6,900	平成30年7月 ～平成31年1月	鈴木正・早野 川添
			石原遺跡	7,050	平成30年5月 ～平成30年12月	鈴木正・永井邦 田中
			ハラビ平遺跡	10	平成30年12月	鈴木正・永井邦 田中
			中村遺跡	20	平成30年12月	鈴木正・永井邦 田中

2. 整理・報告書編集

	事業主体		事業名	遺跡名	調査面積 (㎡)	調査年度
整理	国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	川向東貝津遺跡	3,950	H.22・27・28
	国土交通省 中部地方整備局	設楽ダム 工事事務所	設楽ダム	設楽ダム関連遺跡	14,000	H.30
	県建設部 河川課	尾張 建設事務所	総合治水対策 特定河川事業	清洲城下町遺跡	4,400	H.12・13・29
整理・報告	県建設部 砂防課	尾張 建設事務所	道路改良工事	北山窯跡・勘介窯跡	100	H.29
	県建設部 都市整備課	一宮 建設事務所	街路改良工事 (都)名古屋岐阜線	北丹波・東流遺跡	4,830	H.24・25・27 29・30

3. 平成30年度刊行物

・埋蔵文化財報告書(計2冊)

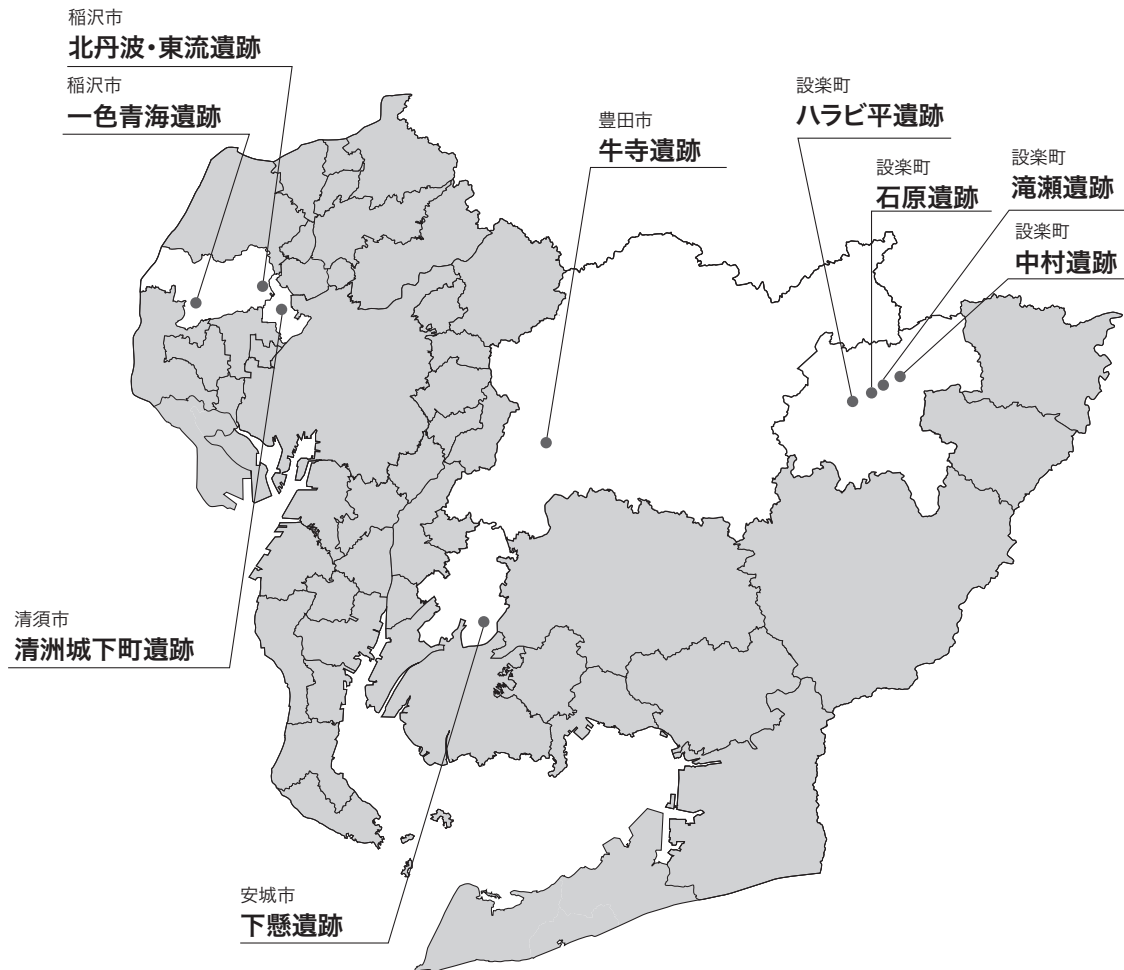
第211集 西地・東地遺跡

第212集 岡山南遺跡

・平成30年度 愛知県埋蔵文化財センター年報

・研究紀要 第19号

平成30 年度 調査遺跡位置図



国土地理院 1/2.5 万地形図「清洲」



国土地理院 1/2.5 万地形図「一宮」



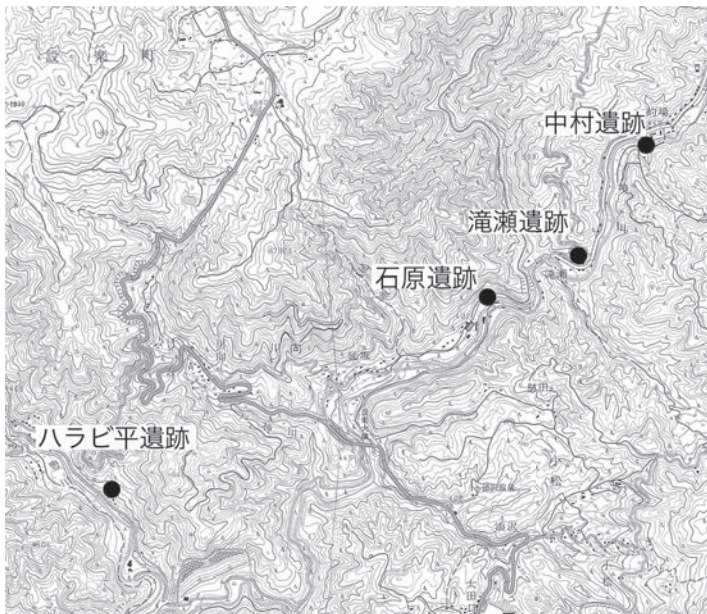
国土地理院 1/2.5 万地形図「清洲」



国土地理院 1/2.5 万地形図「豊田南」



国土地理院 1/2.5 万地形図「西尾」



国土地理院 1/2.5 万地形図「田口」

※地形図は 50%縮小しています。

II. 遺跡調査の概要

きたたんば ひがしながれ
北丹波・東流遺跡(本発掘調査B)

所在地 稲沢市下津丹下田町・下津森町・下津下町西一～三丁目
(北緯35度15分6秒 東経136度49分39秒)

調査理由 街路改良工事(都)名古屋岐阜線

調査期間 平成30年6月～平成30年8月

調査面積 630㎡

担当者 酒井俊彦・永井宏幸



調査地点(1/2.5万「一宮」)

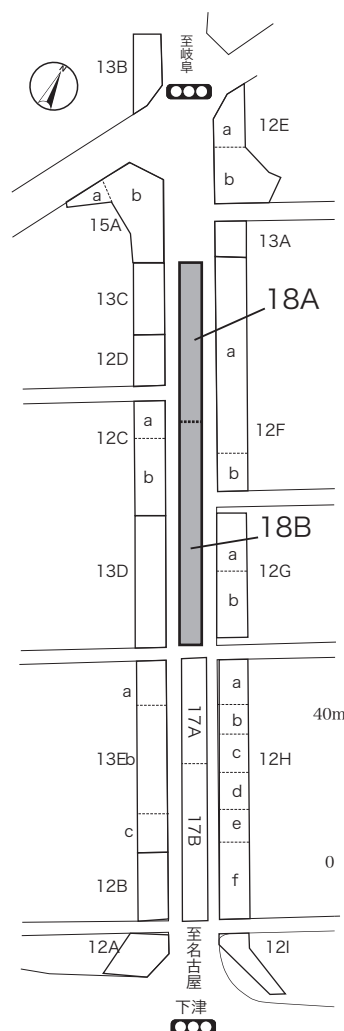
調査の経過 県道名古屋岐阜線の街路改良工事事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、平成24年度に2,320㎡、平成25年度に1,000㎡、平成27年度に390㎡、平成29年度に490㎡おこなった。今年度の調査区は現道部分を対象とし、平成29年度調査区の北側を調査した。

調査の概要 遺跡は、遺跡の北東側にある青木川右岸に広がる自然堤防およびその後背湿地に立地する。標高は現況4～5m前後である。

調査の結果、昨年度に引き続き、古墳時代前期、飛鳥時代から奈良時代初頭を中心とした古代前半期、鎌倉～室町時代を中心とした中世、以上大きく3つの時期を中心に遺構が展開していた。遺構は概ね18A区北寄りと18B区南寄りに集中していた。この間には中世以降の流路と近代以降の水田が展開し、中世以前の遺構を削平していた。

古墳前期 古墳時代前期の遺構は18A区北寄り中央を縦断する大溝112SDとこれに合流する小溝115SD、18B区南寄りに小区画水田などを確認した。遺物は廻間Ⅲ式期を中心とするS字甕や壺、器台などが出土している。

大溝112SDは規模と位置、出土遺物から遺跡の北東部にあたる12Eb003SDと同一遺構である可能性が高い。また、この大溝112SDの東側に溝114SDを確認した。調査区外に広がるため規模や方向は確定できないが、位置関係から12Eb003SDに東接する12Eb005SDと同一遺構である可能性があり、溝114SD→大溝114SDの順に掘削された水田に関連する基幹水路と推定できる。今回の調査対象地は水田と畑地が広がると調査前に想定していたが、水田を検出した地点は18B区の南端部のみであった。水田を面として確認できたのは今回が初めてである。この南端部付近の5㎡前後に4区画の水田を検出した。



調査区位置図

調査区位置図(S=1/2000)

南北方向に幅50cm前後の畦畔が調査区中央を縦断し、東西および南端の調査区壁を取り囲むように畦畔状の高まりが検出された。これら水田の上位には東西方向の溝081SDが横断する。水田関連にともなう水路と思われる。

古 代 古代の遺構は、18A区が溝群、18B区南端が竪穴建物群を中心に確認した。

18A区の溝群は南北方向に2条(107SD・104SD)、東西方向に1条(106SD)確認した。いずれも8世紀前葉を中心とする須恵器・土師器が出土している。107SDは断面が逆台形、幅2m前後、深さ0.5m前後を測る正方位からやや西に傾く南北溝である。溝の北端に109SDが接続し、西方へ1mほど屈折する。南端は緩やかに西方へ屈曲し、調査区外へ伸びる。104SDは断面が逆台形、幅1.5m前後、深さ0.35m前後を測り、南北方向の正方位上に伸び、ちょうど東および西調査区壁辺りでクランク状に屈曲する溝である。いずれの溝も両脇に位置する既年度調査区に同一遺構と推定できる溝がない。注目すべき遺物として、これら2つの溝から各1点、「美濃」施印須恵器が出土している。今年度の類例を含めて、都合6点となった。

18B区南端の遺構は、2面に渡って確認した。上位は8世紀前葉を中心とする竪穴建物5棟、下位は7世紀前半を中心とする竪穴建物4棟を検出した。いずれも全体が把握できる建物はなく、柱穴を確認できた建物も少ない。これらのうち上位と下位に各1棟、造付カマドを伴う竪穴建物が想定できた。

中 世 中世の遺構は、18A区北半分と18B区南端で井戸と溝を中心に確認した。いずれも13世紀前後を中心とする遺物が伴っている。

大溝091SDは、南北方向に延びる溝で、断面が逆台形、幅2m前後、深さ0.5m前後を測る。規模と方向から、12Fa002SDと同一遺構の可能性がある。この大溝091SDは中世遺構群の基軸となる溝と考えられる。091SDの北側に井戸2基と幅0.5m前後の小溝4条を確認した。18A区北端近くに展開する井戸111SEと小溝085SD、086SDなどは091SDの方向に平行あるいは直行する配置となる。大溝091SDに近い井戸102SEと溝088SDは平安時代末頃の遺構で、本遺跡では数少ない時期の遺構である。

18B区南端近くの遺構は井戸が2基(051SE・058SE)、溝が1条(008SD)、柱穴と推定できる小穴を含む多数のピットを確認した。051SEの上位は008SDが東西方向に延びる。井戸の上位に溝が配置された組み合わせは12C区、12D区などでも確認されている。051SEは試掘坑で一部欠損しているが、ほぼ全形が把握できる井戸であった。3m四方の平面形、やや南寄りに円形の基底面があり、そこから漏斗状に立ち上がる断面形となり、深度は1.5m前後を測る。曲物など下部構造はなく、上位層と中位層にブロック混じりの斑土層が認められ、廃棄後人為的に埋めた可能性がある。尾張型第5・6型式の椀・小皿をはじめ、中国産青磁皿片が出土した。特筆遺物に方形の陶硯がある。調査区南端の井戸058SEは調査区南西隅がちょうど井戸の基底部に相当する。深度は1m以上を測り、上部の平面形は1辺3m以上を測る方形であろう。

ま と め 5次にわたる調査成果から「美濃」施印須恵器についてふれておく。

「美濃」施印須恵器が6点出土した。これまでの成果から、窯業遺跡以外からまとまって出土する遺跡は、平城宮跡の5点、各務原市広畑野口遺跡の10点のみで、2番目に多い類例となった。また、尾張国府周辺に位置する船橋市場遺跡の2点は「美濃国」施印と刻書である。「国」の有無が時期差を示すと指摘されているので国府造営の変遷を考える上で興味

深い。なお、尾張大國霊神社周辺は国府の推定地として有力であるが、この近辺における同時期の遺構から「美濃」施印須恵器の出土例はない。「美濃」施印須恵器のみで国府造営は推定できないが、8世紀前葉に限定できる須恵器として紀年名と比肩されることと、716（霊亀2）年に美濃国司笠朝臣麻呂が尾張国司を兼任する時に重なることは、考古資料と文献史料の両側面から検討できる稀有な歴史的事象である。（永井宏幸）



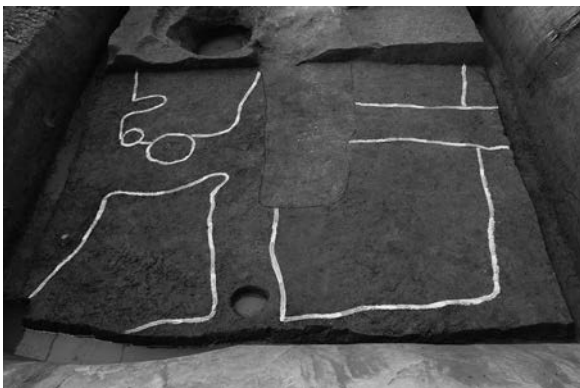
古墳前期112SD完掘北から



古墳前期112SD断面トレンチ7北から



古墳前期115SD遺物出土南から



古墳前期18B区水田検出南から



古墳前期18B区水田完掘南から

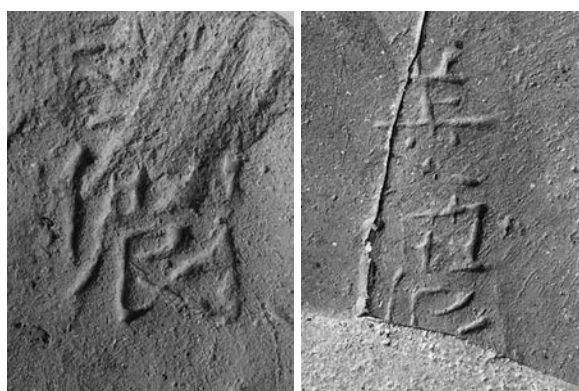


古代18A区107SD北から



古代18A区104SD北から

古代「美濃」施印須恵器

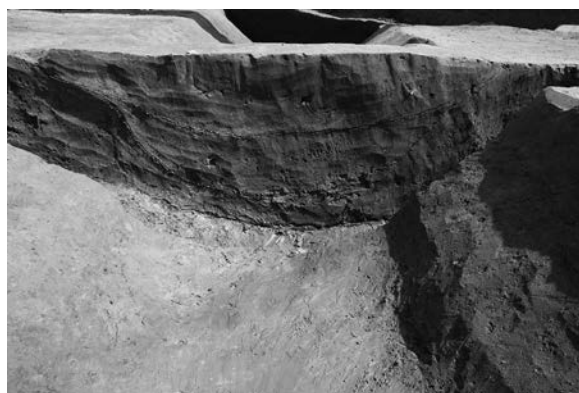


107SD 出土

104SD 出土



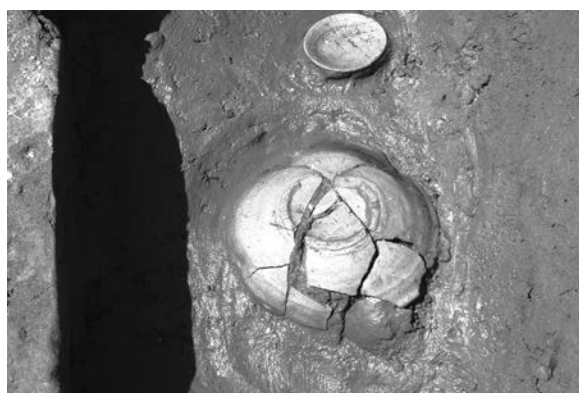
中世18A区全景北から



中世091SD断面南西から



中世091SD完掘西から



中世091SD山茶碗出土南から

いっしきあおかい

一色青海遺跡(本発掘調査B)

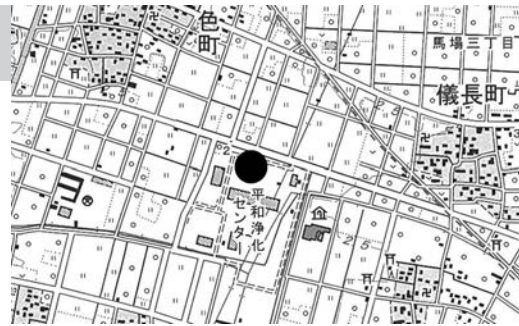
所在地 稲沢市一色青海町、儀長一丁目地内
(北緯35度14分10秒 東経136度45分22秒)

調査理由 日光川上流流域下水道

調査期間 平成30年6月～平成30年11月

調査面積 1,300㎡

担当者 酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「清洲」)

調査の経過 調査は愛知県建設部下水道課一宮建設事務所による日光川上流流域下水道事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成30年6月から平成30年11月にかけて実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地であり、近代の耕作土および床土を除去した1面目として平安時代～江戸時代までの遺構を扱い、1面目の遺構除去後、方形周溝墓と方形周溝墓墳丘覆土直下に検出される弥生時代中期後半の遺構を2面目として扱っている。調査面積は1,300㎡である。

立地と環境 一色青海遺跡は三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道自然堤防上に位置している。現代の地表面の標高は東より西に向かってわずかに降るが、遺構検出面の傾斜も東から西に降る同様の状況である。過去の調査成果より、一色青海遺跡では北西から南東に流れる旧河道が大型掘立柱建物が検出されている集落中心部分で北東に向きを転じる状況が検出されている。今回の調査区は集落中心部の北東に位置し、南西から北東に流れる旧河道が調査区西半分を占め、東半分には旧河道の自然堤防が位置する。東半部では方形周溝墓によって構成される墓域、竪穴建物跡によって構成される居住域が検出された。遺構検出面の標高は東側の方形周溝墓・竪穴建物跡付近で0.7m～1.0m。西側の旧河道付近では0.3～0.5mである。遺構検出面の標高は、本調査区に隣接する南側の2009年度調査区では約1mとわずかに高いが、旧河道の流路が南から北に向かっていることで全体の標高が南から北にも降っていることや、後世の耕地整理によって削平される部分が大きかったことも影響していると考えられる。

調査の概要 今年度の調査区には、2009年度調査区北東部で確認された土取り目的と考えられる攪乱も南西部に存在する。

調査は平成30年7月に着手した。7月の降雨の多さと8月の記録的猛暑により調査の進捗は前半においては遅く、1面目の遺構掘削が完了したのは8月下旬であった。1面目の完了後、2面目の遺構として、方形周溝墓010SZ・020SZ、大溝200SDを掘削し、方形周溝墓の墳丘下で検出された竪穴建物跡や大溝200SDの下層に当たる旧河道400SDの全ての掘削が完了したのは11月中旬であった。

一面の遺構(中近世) 1面目の遺構は、表土直下で検出された大小の土坑、方形土坑、溝175SD等がある。1面目の土坑は全体的に浅く遺物の出土も少量にとどまる。

230SK(大型の方形土坑)

長軸4.17m、短軸2.23mを測る平面形方形の土坑。出土遺物には土器や木片少量があるが、これらは230SKが掘削された際に200SD上層を削平していることから入ったものと考えられる。直接的に時期を示す陶器などは見られないものの、200SDに後続する切り合

い関係や、埋土は他の灰釉陶器や山茶碗が検出された、より小型の方形土坑に類似することから遺構の年代は中世以降と想定される。

溝 (175SD、185SD)

175SDは残存長23.8m、最大幅2.6m、遺構検出面からの深さ0.2～1.1mを測る溝状の遺構で、全体が一定の深さでは掘削されておらず、延長4m～6m、幅2m、遺構検出面からの深さ1.1mの深い部分を繋いだような平面形状をしている。175SD北半部ではこの繋ぎ目に当たる部分は検出できておらず、方形周溝墓の周溝021SDとの重複部分では、021SDの堆積を175SDとして掘削した可能性がある。175SDは部分的に方形周溝墓010SZ、020SZの周溝よりも深く、2面目完掘時においても一部が残存する。

185SDは175SD中央付近で接続する溝状の遺構で、175SDで深く掘削された部分が連結した形状を示す。北を上にして見た場合、175SDと185SDの平面形状は「ト」を左右反転させた状態となる。185SDも現状の検出面上では南西方向へは連続しない。

175SD、185SDの用途については、南半部で浅く接続される部分も検出されるため、水溜め機能を併せた導水施設などが考えられる。

2面の遺構 (弥生時代 中期後半) 方形周溝墓

2面目の遺構として、弥生時代中期の遺構は方形周溝墓とその周溝 (010SZ、020SZ、001SD、002SD、007SD、021SD)、竪穴建物跡 (274SI、279SI、280SI、302SI、306SI、308SI、310SI、326SI、329SK、330SI)、土坑 (100SK、285SK) 等がある。

方形周溝墓 (010SZ)

検出面がほぼ墳丘基底部であり、埋葬施設は残存していなかった。検出時の墳丘規模は東西11.86m (残存長)、南北12.05mを測る。主な出土遺物は、周溝より出土しており、後述する周溝西側中央部で甕3点、細頸壺2点がまとまって出土しているが、周溝内埋葬等の可能性は低く、墳丘上から転落した可能性が考えられる。また、墳丘の検出中にも墳丘埋土より遺物が出土しているが、後述の竪穴建物跡が墳丘直下より検出されていることから、竪穴建物跡の遺物が包含されたものと考えられる。

010SZ周溝 (001SD・002SD)

010SZを巡る周溝。連続すると想定される遺構であるが、南東隅部分のみ調査区境によって分離するため別の遺構番号を付した。幅は2.3m～2.5mで、検出面からの深さは0.7～0.8mを測る。上層を175SDによって削平されているものの、010SZ南西部分付近でやや浅くなる箇所が確認されており、陸橋が存在した可能性がある。

方形周溝墓 (020SZ)

残存状況は010SZと同様で、埋葬施設は残存していない。東西6.54m、南北7.63mを測る。主な出土遺物は周溝より出土し、東側の周溝中からは完形の細頸壺が出土した。

020SZ周溝 (021SD)

020SZを巡る周溝。最大幅1.77mを測り、検出面からの深さは0.65mを測る。010SZ周溝と同じく、021SDも西側は175SDと重複し、削平を受けている。021SDにおいても020SD南西部付近にやや浅くなっている部分が存在するが、175SDの削平を強く受けているため、陸橋部としての明瞭な痕跡は残していない。

007SD

調査区北東部で検出された周溝。020SZ北側に隣接する、過去の調査においても未検出の方形周溝墓の南側周溝と考えられる。出土遺物には土器、磨製石斧、木片がある。本調

査区では020SZと切り合う箇所も無いため、前後関係は不明。

竪穴建物跡

竪穴建物跡の検出状況は、北側の020SZの墳丘盛り土下から周溝021SD西側にかけて、274SI・326SI・310SI・279SI・280SK(280SKはおそらく液状化現象等の理由によって形状が不明瞭だが、竪穴建物跡に加える)計5棟が検出された北側竪穴建物群と010SZの墳丘下で330SI、302SI、308SIの計3棟が検出された南側竪穴建物群が主なもので、200SD東沿いに2箇所竪穴建物跡の一部と考えられるものが検出されるが、南側のかく乱によって大きく欠損しているため、重複した状況は確認できない。

北側竪穴建物群は020SZの西側に位置する。各々の一部を020SZの周溝021SD、および中近世の溝175SDによって欠損する。前後関係の新しい順に、274SIは東西3.21m、南北4.53mで南北に長軸をもつ。326SIは東西4.69m、南北3.26mの東西方向に長軸をもつ。310SIは東西6.08m、南北3.81mで東西方向に長軸をもつ。279SIは東西不明。南北5.54mでおそらく南北方向に長軸を持つ。280SKは平面形状が不明瞭で規模不明。

南側竪穴建物群は010SZの墳丘下で検出された。それぞれの竪穴建物跡は残存状況は浅く、本来の深さよりも削平を受けており、方形周溝墓の検出時には確認できないことから、方形周溝墓の構築等に伴って竪穴建物跡が削平を受けたか、竪穴建物跡の廃絶時に多くの土砂で周囲と一様に埋没した可能性がある。前後関係の新しい順に330SIは東西4.24m、南北7.17mで南北方向に長軸をもつ。302SIは本調査区最大の竪穴建物跡で、いわゆる火災(焼失)住居。東西8.55m、南北7.92mを測る。南西側柱穴には炭化した柱材が残存する。

308SIは東西4.78m、南北2.85mを測る。北半部は液状化現象等の影響で平面形状が不明瞭となっていた。

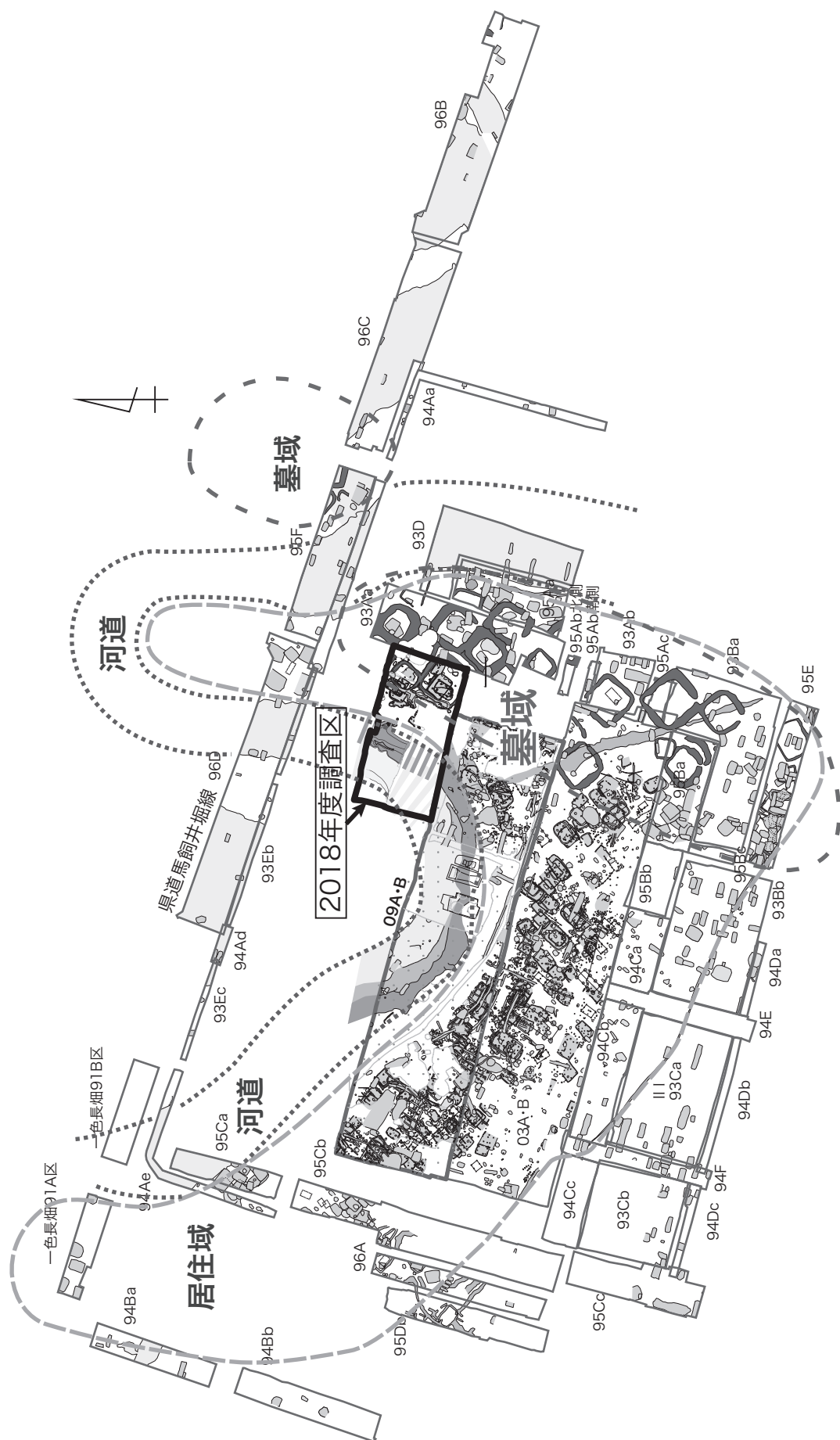
ま と め

これまでの発掘調査成果によって想定された一色青海遺跡の全体像と照らし合わせると、18区の調査区内での結果については、事前に河道、居住域、墓域がそれぞれ想定されていたが、河道は想定どおりの位置で検出された。居住域は河道間際まで展開することによって想定より西側に向かって拡大。墓域は河道からやや距離をおいて位置することが判明、東側に縮小した。居住域・墓域の存在する自然堤防は西や南西から流下する河道・溝(400NR・200SD)を北向きに変えている。09調査区で検出された200SDに先行する大溝600SDは調査区南半部分の攪乱にも影響を受け、本調査区では平面で検出できていない。断面観察では200SDが複数回の再掘削を受けていることが判明し、この中の下層が600SDに相当すると考えられる。当初は600SDが200SDより東よりに流下する想定だったが、前述の自然堤防によって向きを変え、200SDと重複している可能性が高くなった。

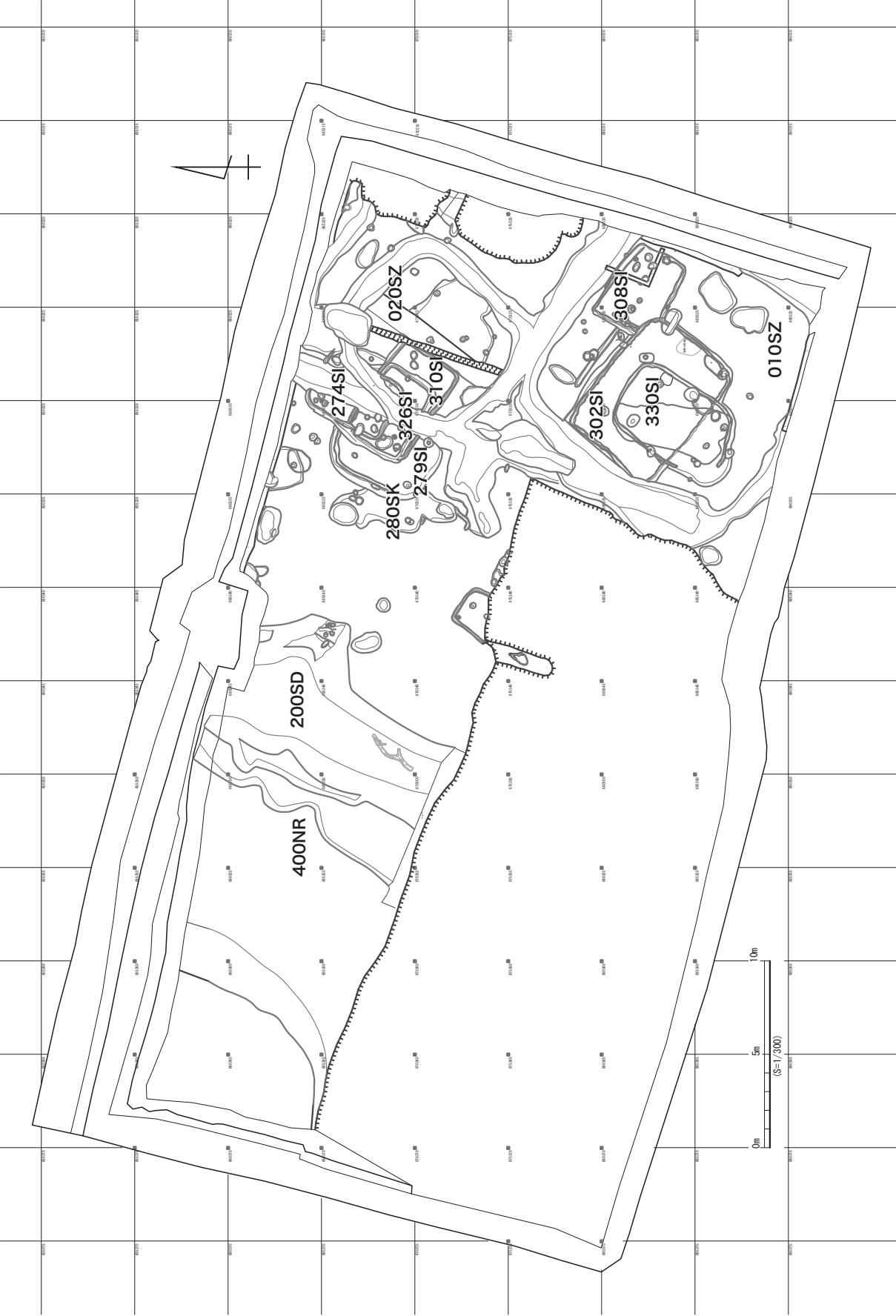
弥生時代の遺構の変遷は、これまでの調査成果によって指摘されている通り、中期後葉の高蔵式期に限定される。遺構として重複していた方形周溝墓の周溝(弥生時代遺構として最新)と竪穴建物群の出土土器に明確な時期差が判別できないため、本調査区内に限っても、北側の竪穴建物群の最大五回にわたる建替と、その後の方形周溝墓の構築にいたるまでが、計百数十年間のうちに行われ、そこで集落が廃絶したと考えられる。

過去の調査においては中世の遺構も多数が検出されているが、本調査区では中世の遺構の残存状態が特に悪く、これは近世以降の耕作地としての掘削が深く及んだためと考えられる。

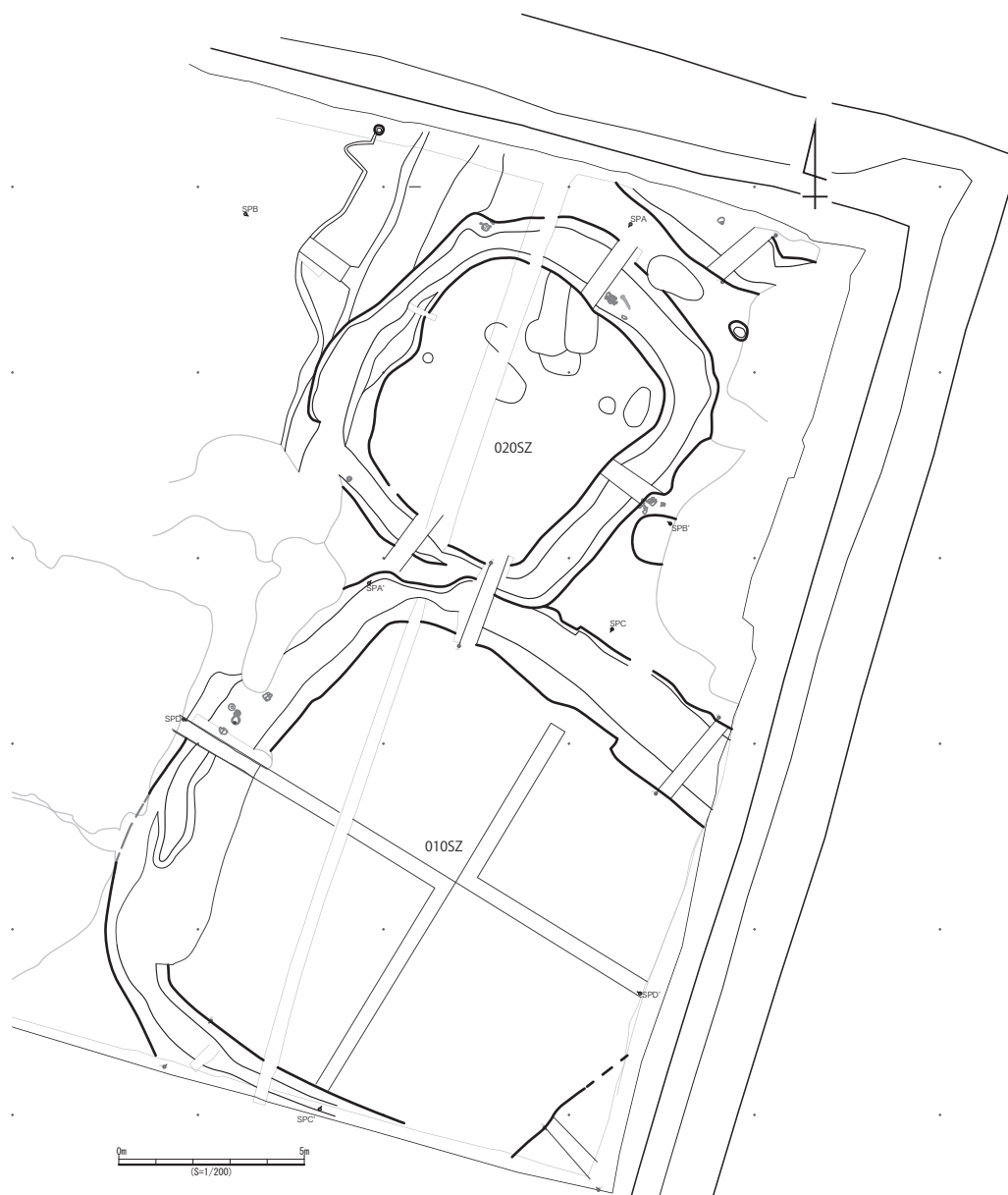
(鈴木恵介)



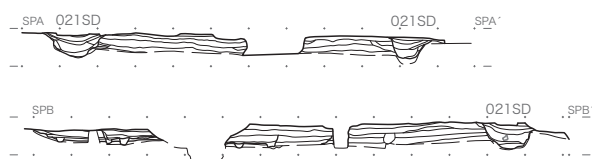
一色青海遺跡集落模式図 (弥生時代中期後葉 S=1/2000)



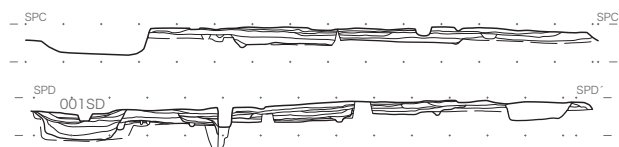
一色青海遺跡18区2面遺構全体図 (S=1/300)



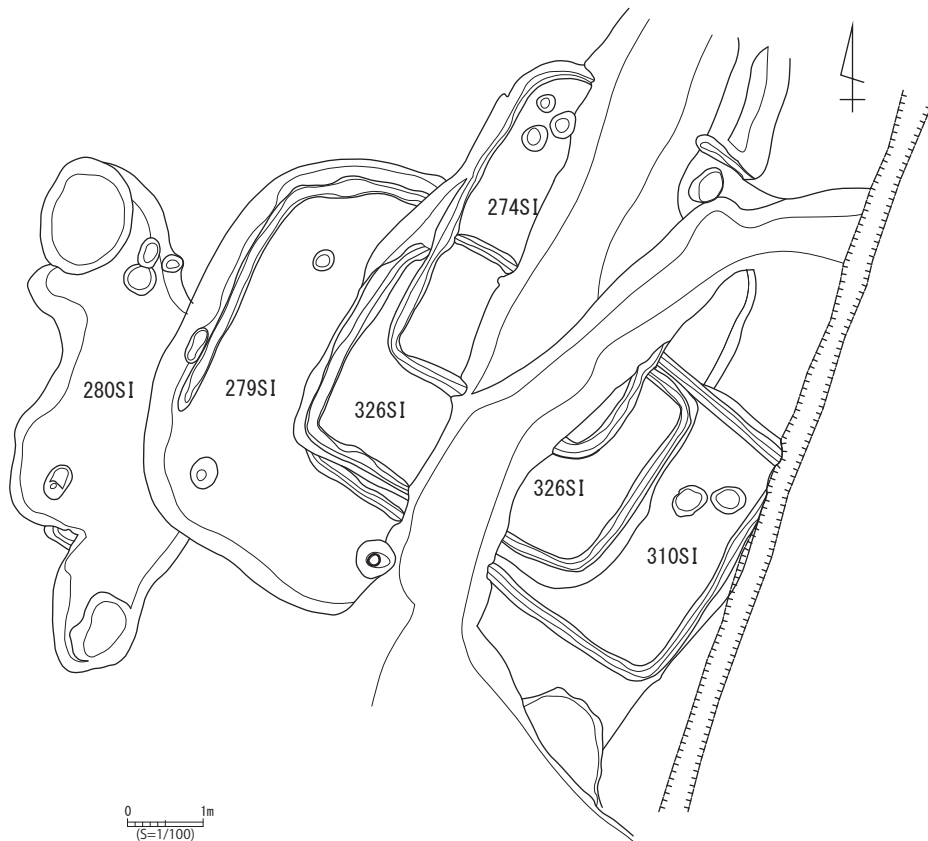
一色青海遺跡18区 方形周溝墓010SZ・020SZ平面図 (S=1/200)



一色青海遺跡18区 方形周溝墓020SZ断面図 (S=1/200)

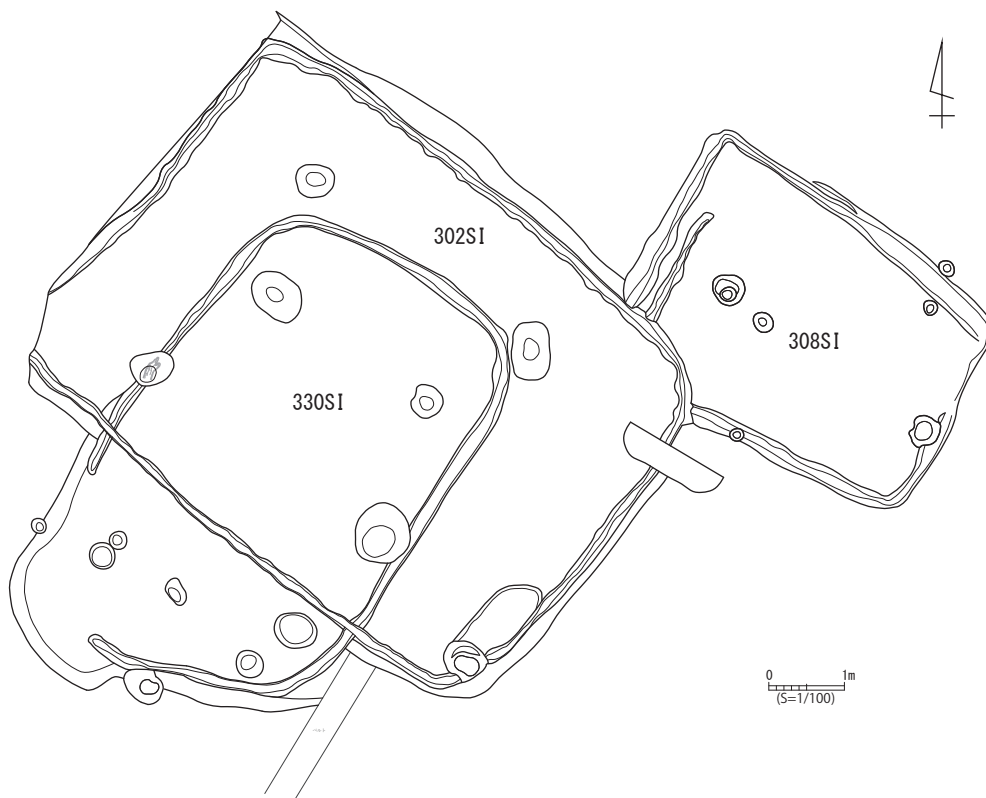


一色青海遺跡18区 方形周溝墓010SZ・断面図 (S=1/200)



新しいものから順に274SI・326SI・279SI・310SI・279SI・(280SK)

一色青海遺跡18区 竪穴建物跡274SI・326SI・279SI・310SI・279SI・280SI平面図 (S=1/100)



新しいものから順に330SI・302SI・308SI

一色青海遺跡18区 竪穴建物跡330SI・302SI・308SI平面図 (S=1/100)



竪穴建物跡330SI・302SI・308SI



竪穴建物跡274SI・326SI・279SI・310SI・279SI



竪穴建物跡302SI出土土器群 (焼失時に据えられた状態)



方形周溝墓完掘状況 (手前020SZ、奥010SZ)



方形周溝墓010SZ周溝001SD出土 土器



方形周溝墓020SZ周溝021SD出土 細頸壺



溝200SD完掘状況



溝200SD出土容器未製品

きよすじょうかまち

清洲城下町遺跡(本発掘調査B)

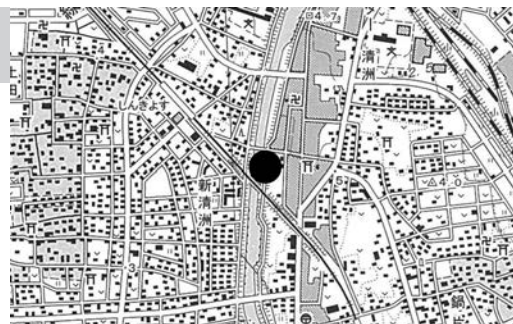
所在地 清須市清洲地内
(北緯35度12分36秒 東経136度50分19秒)

調査理由 総合治水対策特定河川事業船枋橋施工

調査期間 平成30年6月～平成30年10月

調査面積 1,280㎡

担当者 酒井俊彦・蔭山誠一

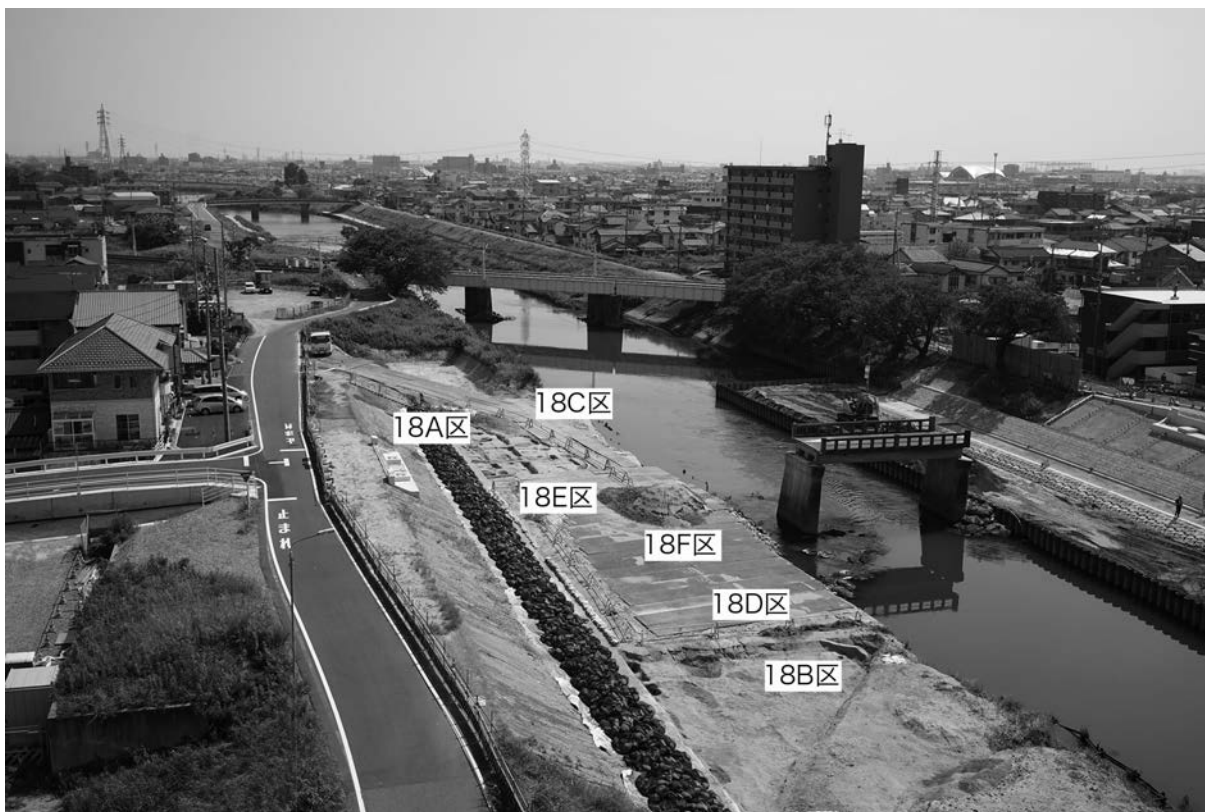


調査地点(1/2.5万「清洲」)

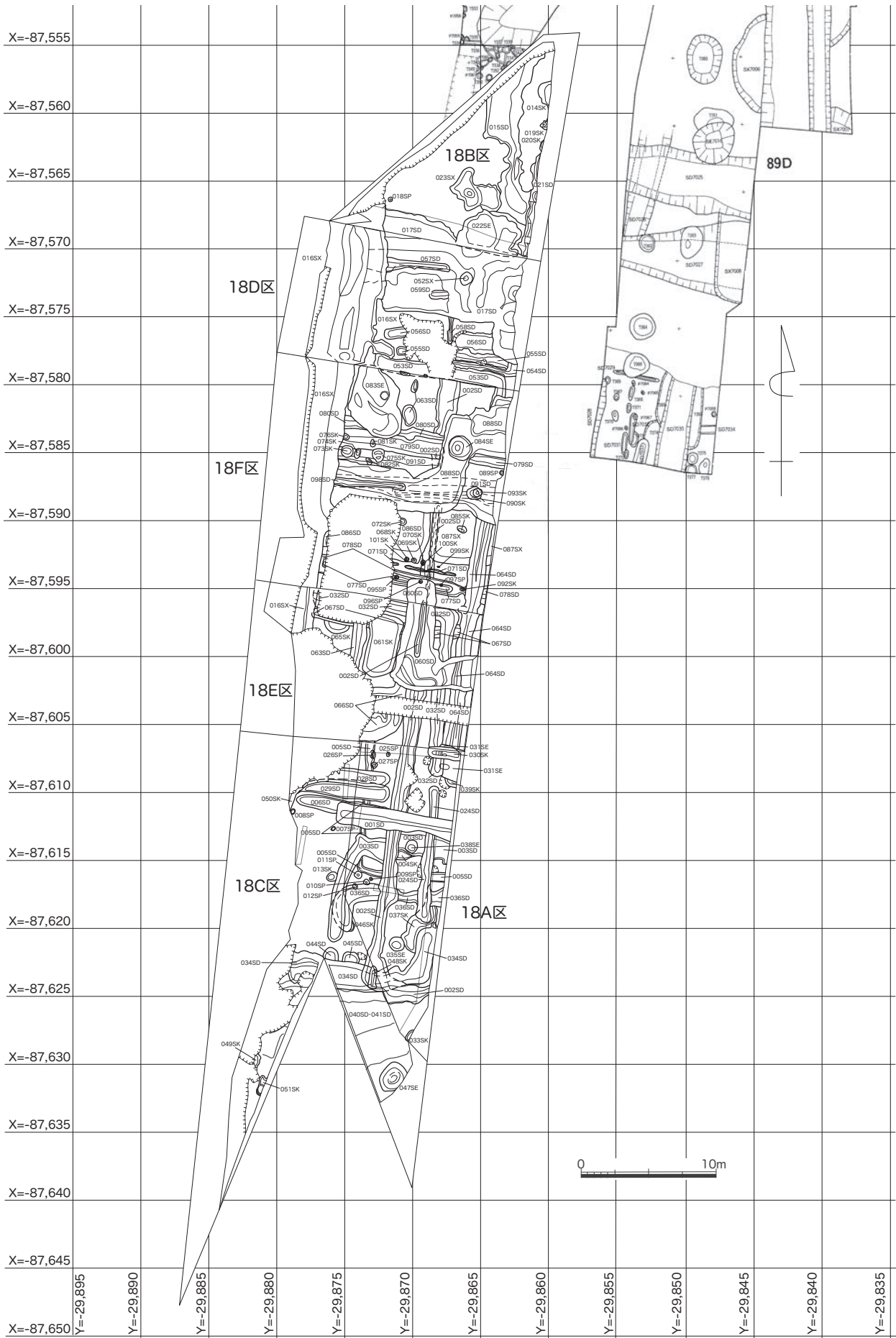
調査の経過 今年度の調査は、平成29年度から続く五条川に関わる総合治水対策特定河川事業船枋橋施工事業にともなう事前調査として、愛知県建設部河川課尾張建設事務所より愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、平成30年6月～10月に調査を実施した。調査区は五条川河川敷の左岸で名鉄名古屋本線北側にあり、船枋橋橋脚の南北の範囲(1,280㎡)で、北から18B区、18D区、18F区、18E区、18A区、18C区として調査した。

立地と環境 清洲城下町遺跡は五条川中流域に形成された自然堤防と後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。遺跡の中央には、名古屋方面の南南東から北北西にのびる美濃街道がはしっており、美濃街道と五条川が交差する北側に清洲城の本丸が想定されている。

調査の概要 今回の調査では、戦国時代から江戸時代にかけての主に2時期の遺構と出土遺物が確認できた。



調査区遠景(北東より)



清洲城下町遺跡18区遺構平面図 (S=1/400)

(1) 戦国時代～江戸時代前期

井戸7基、溝35条、土坑40基、自然流路1条を確認することができた。検出された遺構は、複数で重複しており、一時期に存在する遺構数は少ない。

井戸(SE)は調査した範囲の東側に沿って南北に並んでみられ、18A区と18C区にみられる4基の井戸は、7mから10mの間隔で確認された。井戸の構造物は結桶が確認されるものがあり、18A区035SEと18F区083SEでは、結桶の木材が残っていた。

溝(SD)は、南北方向がN-10°-E前後、東西方向でN-80°-W前後の軸線をもって掘削されており、複数が重複している。したがって2条の溝がほぼ並行して検出されても、屈曲した位置では重複する場合が多く、道路遺構に伴う側溝としては確認できなかった。溝の幅は、約0.3m(18F区071SD)から約7m(18D区017SD)までの規模の違いがあり、規模に応じた区画の違いも推定される。また18F区077SDでは、溝と重複する位置で5ヶ所の柱穴と考えられる小土坑が確認できており(092SK、095SP～097SP、東壁断面において1基)、掘立柱建物の桁側柱穴列か柵の柱穴列の可能性がある。

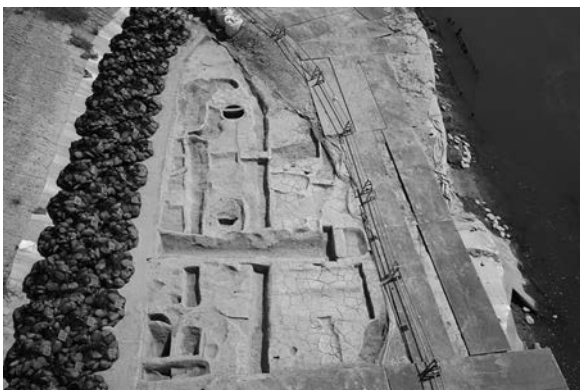
土坑(SK・SX)では、18D区017SDに重複する位置に貝殻と炭化物が入る土坑052SX、18F区091SDに重複する土坑073SKと075SK、18F区091SDに重複する090SK・093SKは長径1m前後の土坑で、戦国時代末の陶磁器が出土した。他に18F区087SX、18E区061SK、18A区037SKは、長径5m前後の大型の土坑であるが、出土遺物は少なかった。

出土遺物には、瀬戸・美濃窯産陶器の灰釉や鉄釉の壺・瓶類、天目茶碗、長石釉・灰釉の皿、播鉢、磁器小皿と碗、土師器の鍋と皿、瓦などがあり、18E区060SDからは一括廃棄された陶磁器や土師器の鍋などが出土した。また18D区017SDと18A区041SDからは、陶磁器や土師器とともに、獣骨片や漆碗、曲物などが出土した。

(2) 江戸時代末～近代

旧五条川の流路を埋めたものと考えられる016SXを確認した。016SXは現在の五条川東護岸の東に埋没していた旧東護岸の石積みの上にあり、18B区南西隅部から18D区西端部、18F区西端部にかけての範囲に検出できた。出土遺物は、江戸時代末から近代にかけての陶磁器、瓦、ガラス瓶などが多く出土した。

ま と め 清洲城下町遺跡は、これまでに多くの発掘調査が行われ、江戸時代の古城絵図などを参考に戦国時代のおおよその姿が復元されている。今回の調査地点は16世紀末～17世紀初頭における清洲城下町遺跡の中で、中堀と外堀の間にある町家推定域に当たる地点である。その一部を確認できたのみではあるが、戦国時代末から江戸時代前期にかけて営まれた区画溝や井戸、土坑を多数確認することができ、多くの遺構変遷が推定できた。(蔭山誠一)



18A区全景(北より)



18A区全景(北東より)



18A区北側遺構全景(東より)



18A区001SD断面(東より)



18A区035SE桶検出状況(北より)



18B区全景(西より)



18B区015SD(北より)



18B区022SE(北より)



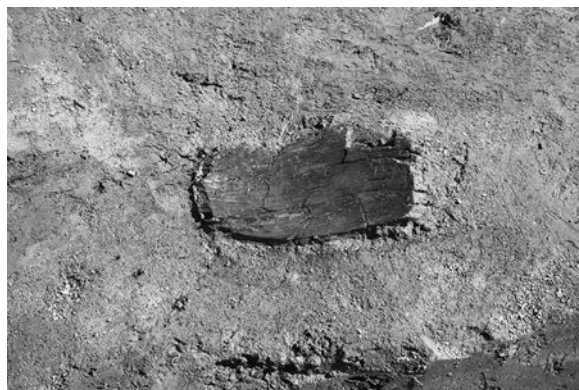
18C区全景(北より)



18C区040SD・041SD(北東より)



18C区041SD出土曲物(南より)



18C区041SD出土漆製品(西より)



18C区041SD出土土師器皿(西より)



18D区全景(北より)



18D区全景(東より)



18区017SD(東より)



18D区052SX掘削状況(東より)



18D区017SD出土 獣骨(北より)



18E区全景 (北より)



18E区全景 (東より)



18E区061SK・063SD (北より)



18E区060SD 遺物出土状況 (南西より)



18E区032SD・064SD (南より)



18F区全景 (北より)



18F区全景 (東より)



18F区柱穴列 (西より)
写真手前より078SD内の095SP・096SP・097SP・092SK

ごでら
牛寺遺跡(本発掘調査B)

所在地 豊田市野見町一丁目地内
(北緯35度4分23秒 東経137度10分2218秒)

調査理由 矢作川河川改修

調査期間 平成30年12月～平成31年2月

調査面積 800㎡

担当者 酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「豊田南」)

調査の経過 調査は国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所による矢作川河川改修に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成30年12月から平成31年2月にかけて実施した。過去の調査成果より、豊田市が昭和48年に実施した牛寺廃寺の調査地に隣接することから、古代寺院である牛寺廃寺に関連する遺構・遺物の出土も予想された。調査面積は800㎡である。

立地と環境 牛寺遺跡は、豊田市東山町付近から南西方向にのびる河岸段丘の先端付近に位置し、同じ河岸段丘上には南山畑遺跡、山の神古墳、市塚古墳など弥生時代から古墳時代の遺跡が連続する。また、豊田スタジアムを挟んで北側の河岸段丘上には高橋遺跡をはじめとする遺跡が多く存在する。調査対象地の現況は堤防内側の荒地であり、結果として近年の堤防の造成や周辺の道路整備等によって地形が大きく改変を受けていた。

調査の概要 調査は平成30年12月より開始した。調査区全体で想定以上に掘削深度が深く、排土処理を適切に行う必要上、調査区をA・B・C区に3分割し、調査区西側をA区、東側南半をB区、東側北半をC区(写真3)として調査を行った。

攪乱に含まれるものから、攪乱は昭和48年の豊田市による牛寺廃寺の調査後に受けたものと考えられる。

遺構 主な遺構は、溝(001SD、023SD)、掘立柱建物跡(024SB)がある。

001SD(写真1)は調査区西端で一部を検出した、長さ5.4m、幅2.7mを測る。出土遺物には常滑窯系甕、播鉢の破片が含まれるため、溝は中世後半以後に埋没したと考えられる。

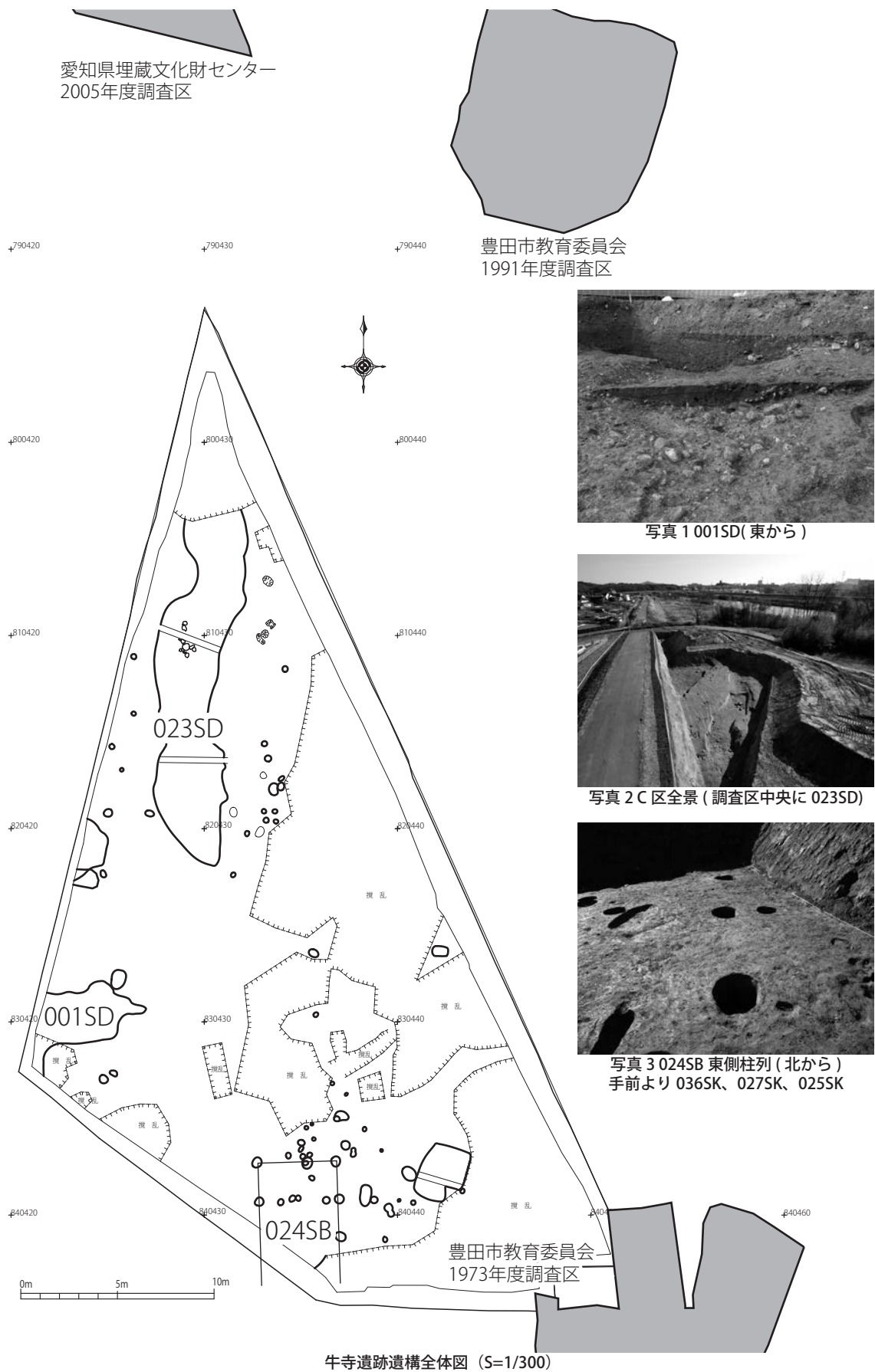
023SD(写真2)は調査区北端から南方向に延び、調査区中央付近では検出できていないが西に向きを変えて001SDに連続していた可能性がある。また、愛知埋文2005年度調査区のSD01a・SD01bに連続する溝の可能性がある。出土遺物には近世の瓦片も包含する。

024SBは、A区014SK、015SK、B区025SK、027SK、036SKよりなる掘立柱建物跡である。柱間は桁行で約1.9m、梁間は4m。南へ続く可能性がある。昭和48年度の調査で検出された基壇状遺構の北西方向に十数メートルと近接し、015SKを除く4つの柱穴から、須恵器、瓦の破片が検出されていることから、牛寺廃寺に後続する時期に存在した可能性がある。

他の遺構の出土遺物には、中世陶器片(山茶碗)、瓦片、須恵器浄瓶頸部がある。

まとめ 本調査区では、古代から中世にいたる時期の遺構を確認した。また、堤防上の道路周辺がもっとも大きく攪乱を受けており、遺構面が削平されていた。堤防より離れるにしたがって攪乱は浅くなり、小土坑をはじめとする遺構は増加傾向にあった。将来的に調査が予定されている北側の隣接地域については、本調査区の断面で確認できる限り遺構面は残存していると想定される。

(鈴木恵介)



しもかけ

下懸遺跡 (本発掘調査B)

所在地 安城市小川町
(北緯34度54分25秒 東経137度5分43秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 平成30年11月～平成31年2月

調査面積 900 m²

担当者 酒井俊彦



調査地点 (1/2.5万「西尾」)

調査の経過 調査は中小河川改良工事に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて調査を実施したものである。本遺跡は平成12、21年度、25～28年度に鹿乗川導水路の東側と鹿乗川と導水路間の調査を行っている。今回を含めた総調査総面積は9800 m²である。今年度は下懸橋の南側、鹿乗川と導水路間の調査を行った。

立地と環境 本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。鹿乗川は碧海台地東辺を南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成12年より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の5遺跡が連続して所在する。中世以前の鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、本遺跡及び姫下、惣作、寄島で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧鹿乗川の自然堤防上に展開し、標高は5～6mを測る。これまでの調査では弥生時代、古墳時代前期、古代および中世の遺構、遺物が検出されている。また、調査区北側には北東から南西方向に流下する弥生時代以前の旧河道が確認され、古墳時代前半の土器と木製品が出土している。

調査の概要 今年度の調査区は平成25年度B区の北側、平成26年度C区の南側に隣接する部分である。調査は南北に長い調査範囲を北半を18A区、南半を18B区として調査区を設定し、上下2面の調査を行った。上面は近世～昭和期の耕作土層下の古墳時代包含層である黒褐色土層上面で遺構検出を行った。上面ではA区で北東から南西に走る幅約2m、深さ0.3mの中世溝1条を検出し、少量の山茶碗と常滑窯産甕が出土した。下面は包含層下位の暗灰色シルト層上面で遺構検出を行った。主な遺構として、古墳時代の竪穴建物、土坑、溝が検出された。竪穴建物はA区下面で3棟検出され、いずれも遺存状況が悪く、床面近くまで削平されている。規模が判明するもので短軸約2.8m長軸3m以上を測り、他2棟は不明である。このうち2棟は床面上に炭化物層が確認された。また、A区で長径3m以上の大形土坑を検出したが、大部分が調査区外となるため性格は不明である。出土遺物については、黒褐色土包含層中および攪乱土層から弥生時代後期土器、古墳時代土師器、古代土師器、灰釉陶器などが出土している。

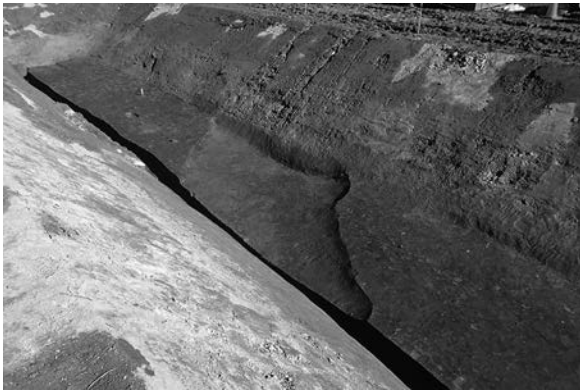
まとめ 調査区の北から西側にかけて弥生時代以前の旧河道が存在し、今回の調査部分はこの隣接する微高地に相当する。調査区北側と南側の調査では竪穴建物は無く、遺構は希薄である。今年度調査区では比較的多くの遺構が検出された。立地環境を踏まえて遺跡内の遺構分布、集落立地などについて検討することが課題である。(酒井俊彦)



A区上面全景 (西より)



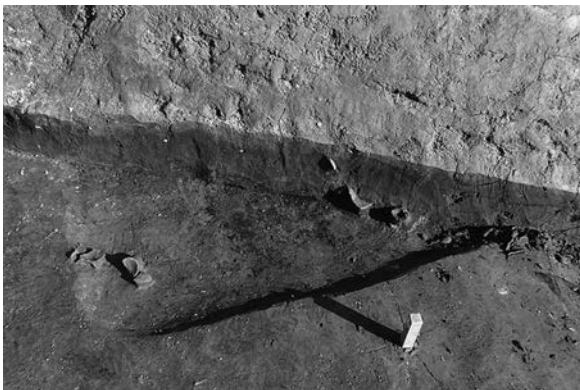
A区下面全景 (東より)



A区上面中世溝



A区下面遺構



A区下面竪穴建物遺物出土状況



A区下面竪穴建物完掘状況



A区下面遺物出土状況



調査区遠景 (南より)

たきせ 滝瀬遺跡 (本発掘調査B)

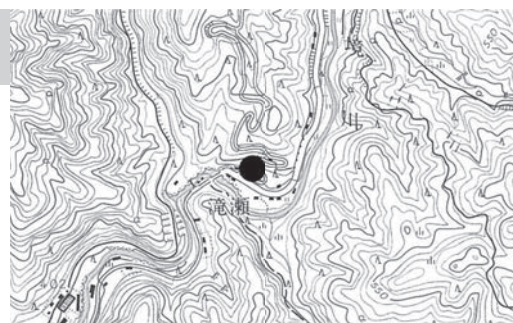
所在地 北設楽郡設楽町八橋字タキセ
(北緯35度6分33秒 東経137度33分58秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成30年7月～平成31年1月

調査面積 6,900㎡

担当者 鈴木正貴・早野浩二・川添和暁



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。平成27・28年度に実施した県道10号以南の発掘調査においては、主として縄文時代早期・中期・

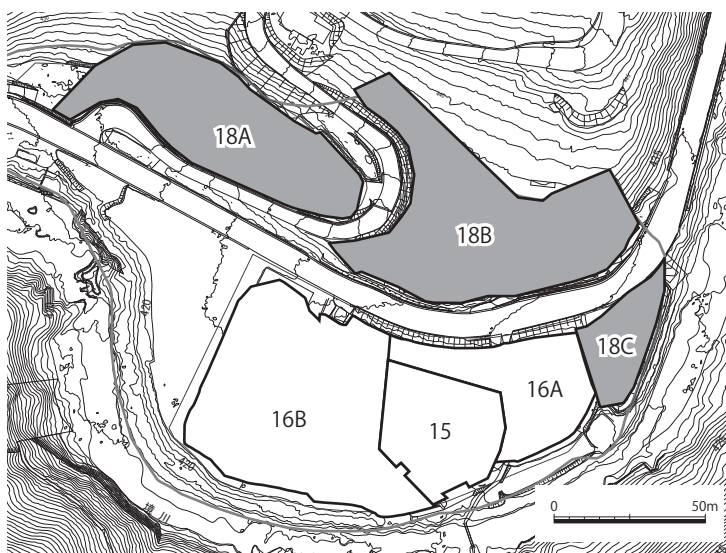


図1 調査区配置図 (1:2500)

後期の遺構と遺物が確認されている。平成30年度は、県道以北の丘陵斜面の上位に18A区(西半)と下位に18B区(東半)、16A区に隣接し、境川に面する段丘上に18C区を設定した。

立地と環境 滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地し、遺跡には江戸時代の伊那街道が通る。対岸の長江川右岸には縄文時代と平安時代の遺物散布地である八橋大平遺跡、滝瀬遺跡を臨む丘陵上の緩斜面には縄文時代の遺物散布地である長久保遺跡、境川に合流するタコウズ川左岸沿いの丘陵緩斜面には縄文時代の遺物散布地である根道外遺跡が分布する。

調査の概要 県道以北の丘陵斜面下位の18A区においては、主として平安時代の竪穴建物跡を含む遺構群、県道以北の丘陵斜面上位の18B区においては、主として縄文時代早期前葉以前(草創期末から早期初頭)の竪穴状遺構群、県道以南の段丘上の18C区においては、主として縄文時代後期から晩期の遺構群と近世以降の遺構群を検出した。(早野浩二)

18A区 18A区は南西側にある谷地形に向かった傾斜地形となっている。谷の堆積層は、表土・耕作土の下は近世末以降の黒色粘土層が2m以上にも渡って厚く堆積しており、その下には褐色粘土質シルト層、さらには巨礫混りの黄褐色砂質シルト層(地山)へと続く。

本調査区で遺構が展開していたのは、調査区北東側の緩斜面区域のみである。層序は、上からI層(耕作土あるいは盛土)・II層(小礫を含む黒色シルト層)・III層(灰褐色粘土質シルト層)・IV層(灰黄褐色粘土質シルト層)・V層(黄褐色粘土層あるいは巨礫混りの砂質シ

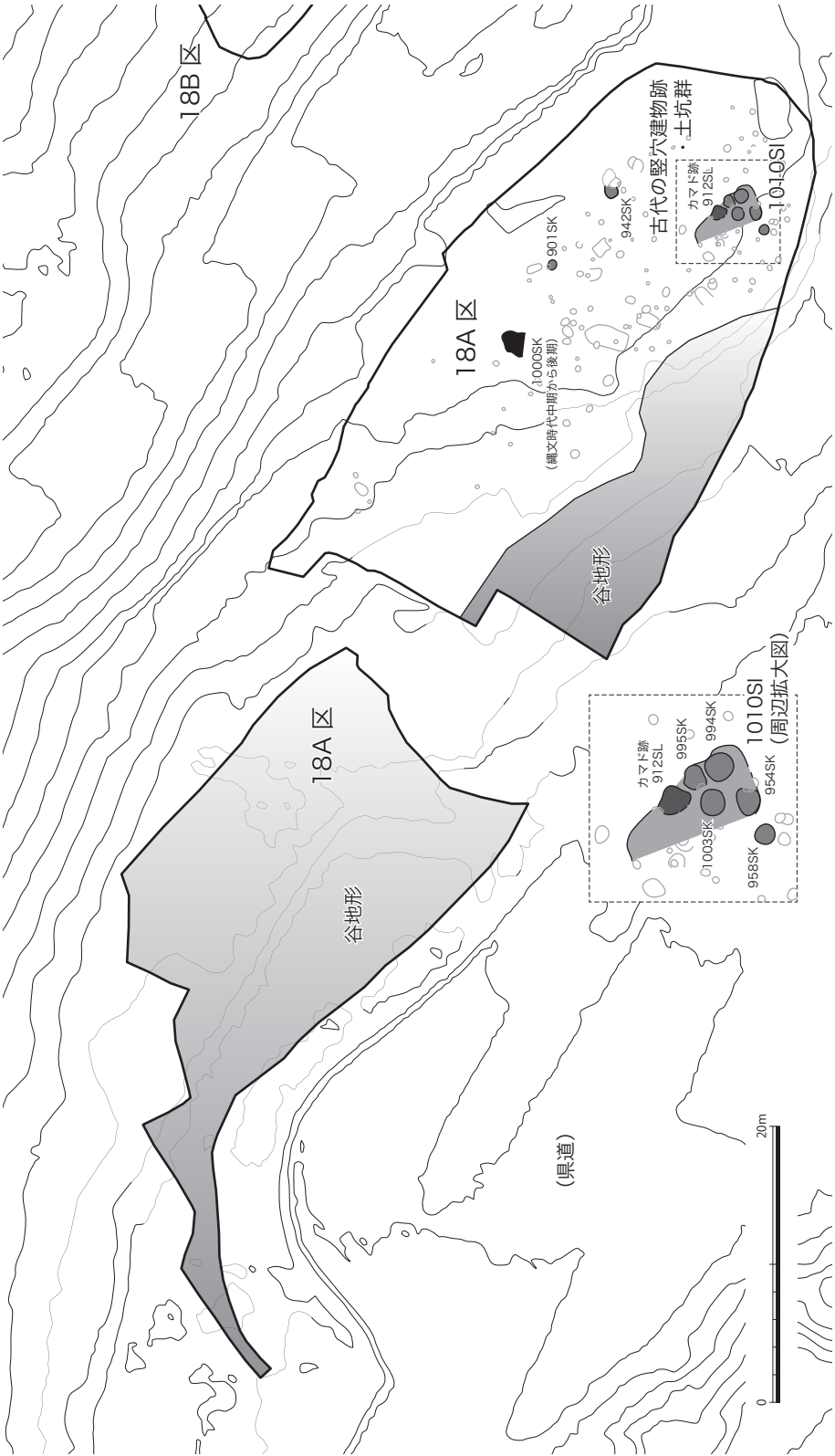


図2 18A区遺構配置図 (S=1/500)

ルト層)の堆積が確認できた。このうち、II層は近世の遺物を含む包含層、III層は古代の遺構・遺物を含む包含層、IV層が縄文時代の早期以前と考えられる遺物包含層、V層が地山である。ここでは、IV層上面で古代の遺構群の展開を確認することができた。

古代の遺構には、カマドを伴う竪穴建物跡・土坑・ピットがある。竪穴建物跡(1010SI)は、緩斜面上方の北東端のみが辛うじて残存していた。中央にはカマド跡(912SL)があった。構造の残存状況は良好で、袖にした盛土部分や壁面に添わせた板石の構造などが観察された。西側板石はカマド土坑掘り方に密接しており、かつ下は地山に埋めこまれた状態で見つかった。一方、東側板石はカマド土坑掘り方との間に焼土を含む層が挟まっており、かつ掘り方底面より若干上位で検出されたことから、機能中に作り替えが行なわれた可能性がある。カマド底面および側面には被熱痕跡が認められた。その面とは別に、底面直上には焼土が10cm程度水平堆積しており、さらにその上面には板石が配されていた。配された板石の上から、灰釉陶器や土師器甕片がまとまって出土した。

径1m程度の土坑群が、この周辺から集中して見つかった(954SK・955SK・958SK・994SK・954SK・1003SK・958SK)。1010SIとの前後の関係は不明であるが、955SK・994SKに関しては、1010SIより後で形成されたものである。これらの土坑からは炭化材由来の炭化物が多量に出土した。955SK・994SKでは断面形状が袋状を呈していた。これら土坑群から北に7mほど離れた、緩斜面上位で見つかった942SKも同様な遺構である。いずれも遺構からも、碗や段皿などの灰釉陶器片が出土した。また、901SKはこれらとは異なる小型の土坑であるが、灰釉小碗の出土を見た。

ピットは緩斜面に渡って広く検出されたものの、掘立柱建物跡あるいは列として確認できたものはなかった。埋土はIII層のみならずII層のものもあることから、一部近世のものも含まれてる可能性がある。

縄文時代の遺物が出土した遺構には、100SKがある。袋状土坑の可能性を考慮して調査を進めたものの、一方が浅くかつ一方が深い土坑の埋土状況や底面形状では、倒木痕を含めた別性格の落ち込みと考えられる。埋土内からは、縄文時代中期から後期の土器片や磨製石斧片が出土した。

IV層は、旧表土のような堆積層である。掘削したところ、緩斜面全体に渡って、礫器のほか、溶結凝灰岩や安山岩の剥片石核類が散在的に出土した。定型的な石器および土器の出土が認められなかったことから詳細な時期比定は難しいものの、縄文時代早期以前の所産である可能性が高い。

V層は、特に調査区北東側において、極めて均質な粘土層となっていた。調査時においても地下水の影響か、水分を多く含む堆積層であった。この均質な粘土は、調査後の深掘りによって、最大2m程度も堆積していることが確認された。(川添和暁)

1 8 B 区 18B区の主要な遺構として、丘陵上位の緩斜面において検出された縄文時代早期前葉以前(草創期末から縄文時代早期初頭)の竪穴状遺構(竪穴建物)、縄文時代早期の可能性が高い集石遺構、縄文時代後期初頭の土器敷き遺構等がある。その下位の丘陵斜面は巨礫を含む礫層が広範囲に露出し、遺構はほとんど検出されなかったが、南東端付近においては、16A区・18C区に連続すると思われる黒色土(遺物包含層)の堆積、集石遺構を確認した。

竪穴状遺構は11基を検出した。これらには相互に重複する竪穴状遺構(848SI・809SI)も含まれ、先後関係も判明している(848SIが先行し、809SIが後出する)。

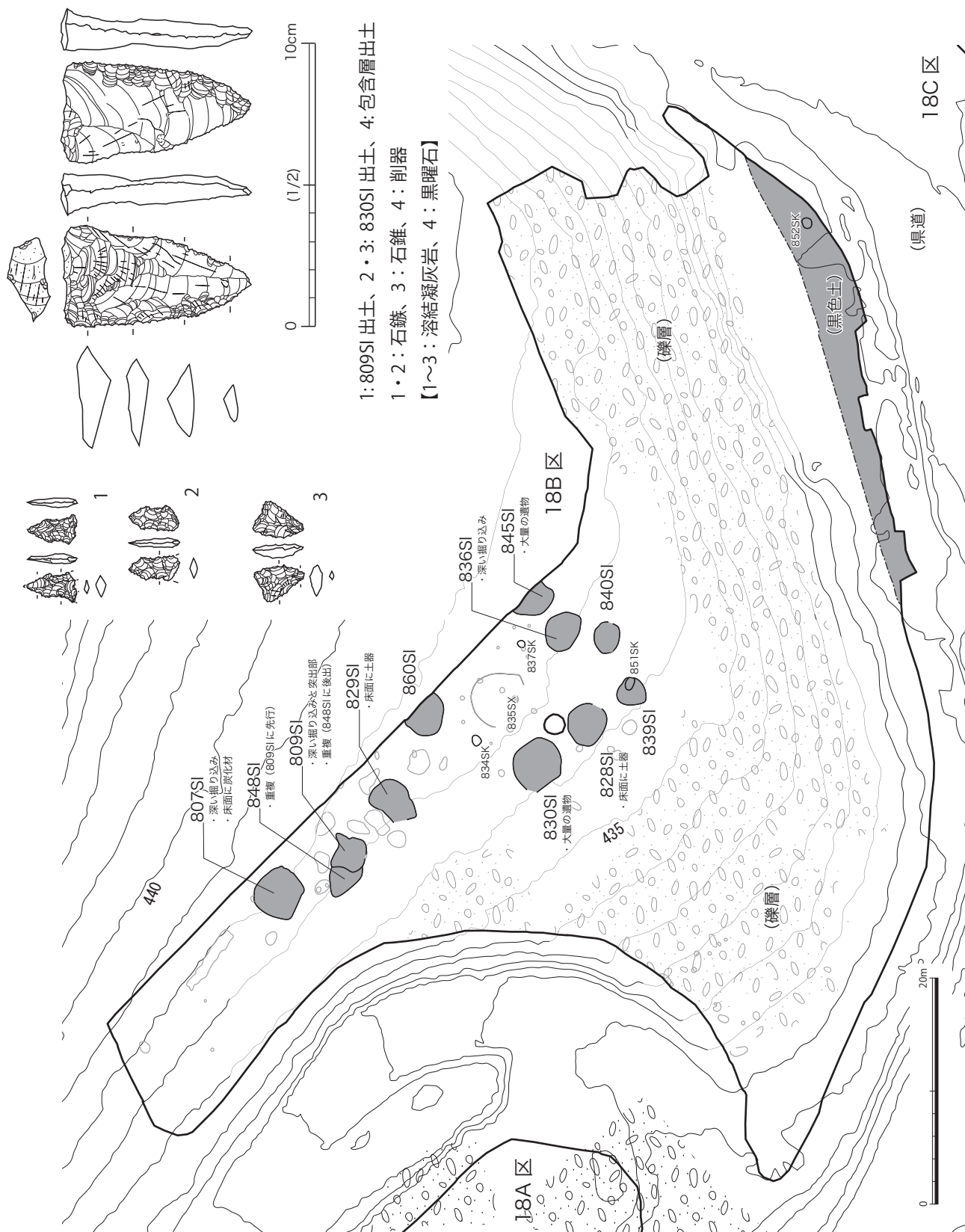


図3 18B区遺構配置図 (S=1/500)・出土遺物 (1/2)

規模は長軸 5 m から 6 m 程度の大型の部類に属する遺構 (807SI・830SI)、長軸 2 m から 3 m 程度の小型の部類に属する遺構 (839SI・840SI)、長軸 4 m 程度の中間的な遺構 (848SI・809SI・829SI・860SI・828SI・836SI・845SI) がある。平面形は隅丸方形に近い形状 (807SI・836SI)、円形に近い形状 (809SI・860SI)、隅丸方形と円形の中間的な形状 (830SI・828SI)、やや不整な方形 (829SI・845SI)、不整な円形 (848SI・839SI・840SI) がある。(竪穴状の) 掘り込みは、丘陵側を竪穴状に著しく深く掘削する遺構 (807SI・809SI・836SI・860SI?)、全体として掘り込みがやや深く、断面鉢状に掘削する遺構 (830SI・845SI?)、掘り込みがやや浅く、緩やかな遺構 (848SI・829SI・828SI・839SI・840SI) がある。

竪穴状遺構に付属する柱穴はやや明確さを欠くが、床面中央付近に 1 基または 2 基程度の柱穴様の小土坑が確認される遺構 (807SI・848SI?・860SI・828SI?・845SI)、それらを含めて柱穴が確認されない遺構 (829SI・830SI・839SI・840SI・836SI) がある。炉は確認されていないが、809SIにおいては、北東方向に突出する部分がわずかに被熱赤変し、周囲に炭化物も散在していた。

検出した竪穴状遺構の大半 (848SI・809SI・829SI・830SI・828SI・836SI・845SI) からは、表裏縄文系土器、撚糸文系土器を主とする縄文時代早期前葉以前 (草創期末から縄文時代早期初頭) の土器が出土している。なお、竪穴状遺構とその付近から明確な押型文系土器は出土していない。土器を含む遺物は覆土中からの出土が多いが、床面から良好な状態で土器が検出された遺構 (829SI・828SI) もある。また、覆土中から石皿・台石類、磨石・敲石類、石鏃、石錐、剥片等の石器、礫が大量に出土した遺構 (830SI・845SI)、竪穴建物 (竪穴状遺構) の床面付近に炭化材が良好に遺存していた遺構 (807SI) もある。後者について、放射性炭素年代測定をした結果 (PLD-37115)、¹⁴C 年代を暦年代に校正した年代範囲で、9152-8807 cal BC (95.4%) を示した。なお、剥片石器の使用石材は溶結凝灰岩、安山岩が主体である。その他、同時期の特徴的な遺物として、包含層中から出土した黒曜石製の削器がある。

集石遺構は 3 基を検出した。851SK は長軸 1.2 m 程度で、839SI と重複し、それに後出する。遺構には石皿・台石類、扁平な大型の石材が集積され、石材には被熱赤変したような部分も認められた。834SK は長軸 0.9 m 程度で、拳程度の大きさの礫が集積され、被熱赤変した礫も多く含まれていた。集石遺構から土器は出土していないが、検出状況等から縄文時代早期に帰属する可能性が高いと考えられる。

縄文時代後期初頭の土器敷き遺構 (837SK) は、破片化した深鉢約 1 個体分が検出された遺構で、土器は基盤層上に直接、敷かれた状態であった。(早野浩二)

18C 区 18C 区は、16A 区に隣接する、境川沿いの低位部分に位置する。調査区中央部分は後世の平坦面造成のために削平が著しかったものの、県道側と境川脇では、包含層の残存が良好であった。

層序は、調査区北の県道側では、上から I 層 (表土および盛土)・IIa 層 (礫混じり黒色粘土質シルト層)・III 層 (黒色粘土層)・IV 層 (灰黄褐色粘土質シルト層)・V 層 (黄褐色粘土質シルト層) である。この層序は 16A 区と同様で、IIa 層は近世以降の堆積層、III 層が縄文時代後期前葉の包含層、IV 層が縄文時代早期の包含層、V 層が地山である。IIa 層からは旧伊那街道と思われる道路状遺構が見つかった。III 層では後期前葉を中心とする遺物が出土し、IV 層上面で、石皿の埋納された土坑 (785SK) が見つかった。また、付近からは、内面に赤色顔料の残存する土器底部が見つかった。

今回の 18C 区では、境川に向かう調査区東端でも包含層の保存が良好であった。I 層下か

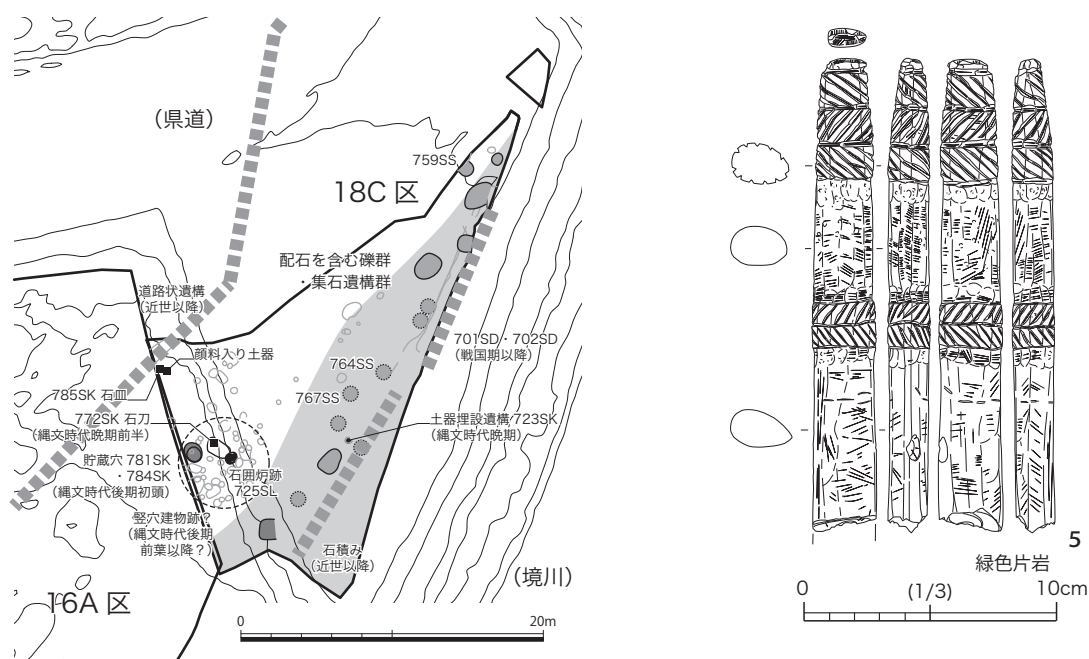


図4 18C区遺構配置図 (S=1/500)・出土遺物 (1/3)

らは、IIb層(黒褐色砂層)およびIII層に相当する灰褐色砂質シルト層が見つかった。IIb層は、細片化した灰釉陶器および山茶碗が含まれる層で、戦国期以降の層と想定される。調査区北東端で見つかった701SD・702SDは、このIIb層内で構築されている溝であり、特に701SDは両側に板状礫が配されていた。その下で確認された灰褐色砂質シルト層からは、土器片・石器がまとまって出土した。この層は形成途中に円礫が集石状に多く含まれており、一部には配石が確認された(764SS・767SS)。また、この層を掘り込んで縄文時代晩期に属する立位の土器埋設遺構(723SK)も見つかった。灰褐色砂質シルト層を掘削した下のV層直上では、落ち込み内で集石が複数個所で見つかった。明確に被熱痕が認められるものは限定的で、被熱痕の明瞭な759SSは集石炉跡であったと考えられる。

16A区に接する調査区西端中央では、IV層直上で、土坑・ピットがまとまって見つかった。725SLは石囲炉跡である。この炉跡は四方を板石で囲むものであるが、板石が二重になっている部分があった。精査した結果、この炉跡は二時期のものが重複していたことが明らかになった。また、この周囲を見ると725SLを中心にした径5m程度の範囲内にピットが検出されたことから、この範囲に竪穴建物跡があったことが想定できる。時期の詳細は不詳であるが、状況から縄文時代後期前葉以降に属すると考えられる。

725SL脇には、長軸1m程度の土坑(772SK)が検出された。埋土中位のレベルで炭化物粒を多く検出した土坑で、埋土には遺物はほとんど含まれないものの、底面では石刀・台石などが出土した。石刀は榎原文様が刻まれており、晩期前半に属する(5)。この遺構は土壙墓のようにもみえるが、底面は片側のみが深い形状となっており、性格は不明である。

また、772SKの脇には、径1mを越える大型の土坑が検出されている。掘削・埋納を繰り返された土坑で、本来は貯蔵穴であったと考えられる。上部を781SK・下部を784SKとし調査したところ、781SKの底面で、板石が複数枚敷かれた状態で見つかった。両遺構とも多量の土器片が出土したが、板石下の784SKでは、多量の深鉢片が敷かれたように配されていた。781SK・784SKの出土遺物は、ともに縄文時代後期初頭が主体である。(川添和暁)



滝瀬遺跡全景



18A区全景(東半)



18A区全景(西半)



18A区古代のカマド跡912SL土層断面



18A区古代の土坑942SK出土灰釉陶器



18B区全景



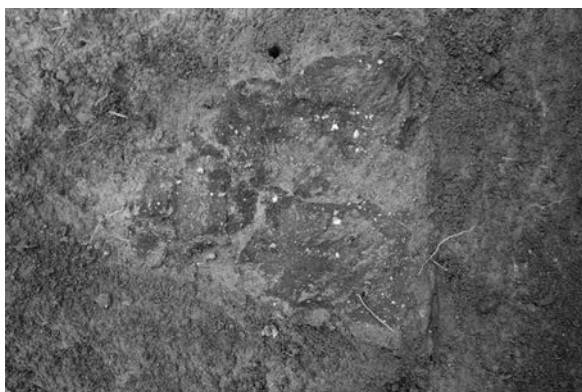
18C区全景



18B区重複する竪穴状遺構848SI・809SI



18B区竪穴状遺構830SI遺物検出状況



18B区竪穴状遺構829SI床面出土縄文土器



18B区竪穴状遺構845SI



18B区竪穴状遺構860SI



18B区集石遺構851SK



18B区集石遺構834SK



18B区土器敷き遺構837SK



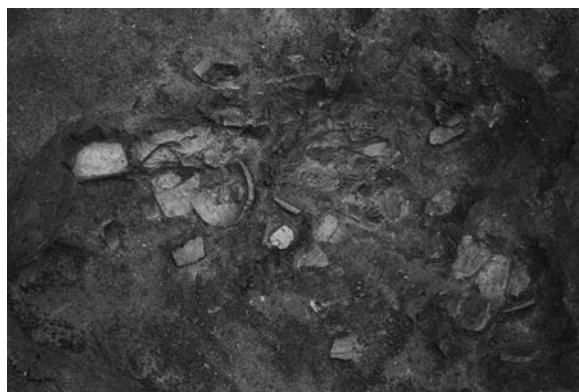
18C区遺物包含層内集石・礫群出土状況



18C区集石遺構759SS



18C区配石遺構764SS



18C区貯蔵穴784SK内石組み下土器出土状況



18C区石囲炉跡725SL



18C区石囲炉跡725SL周辺ピットなど



18C区石皿出土状況



18C区土坑772SK内石刀

いしはら

石原遺跡(本発掘調査B)

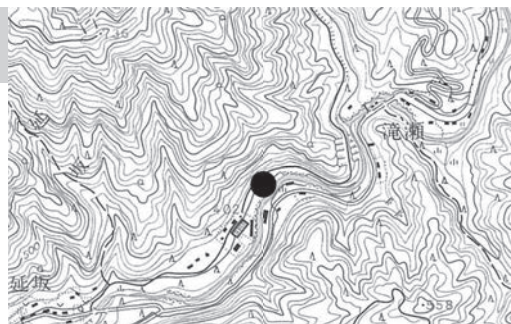
所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度6分55秒 東経137度34分22秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成30年5月～平成30年12月

調査面積 7,050m²

担当者 鈴木正貴・永井邦仁・田中 良



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

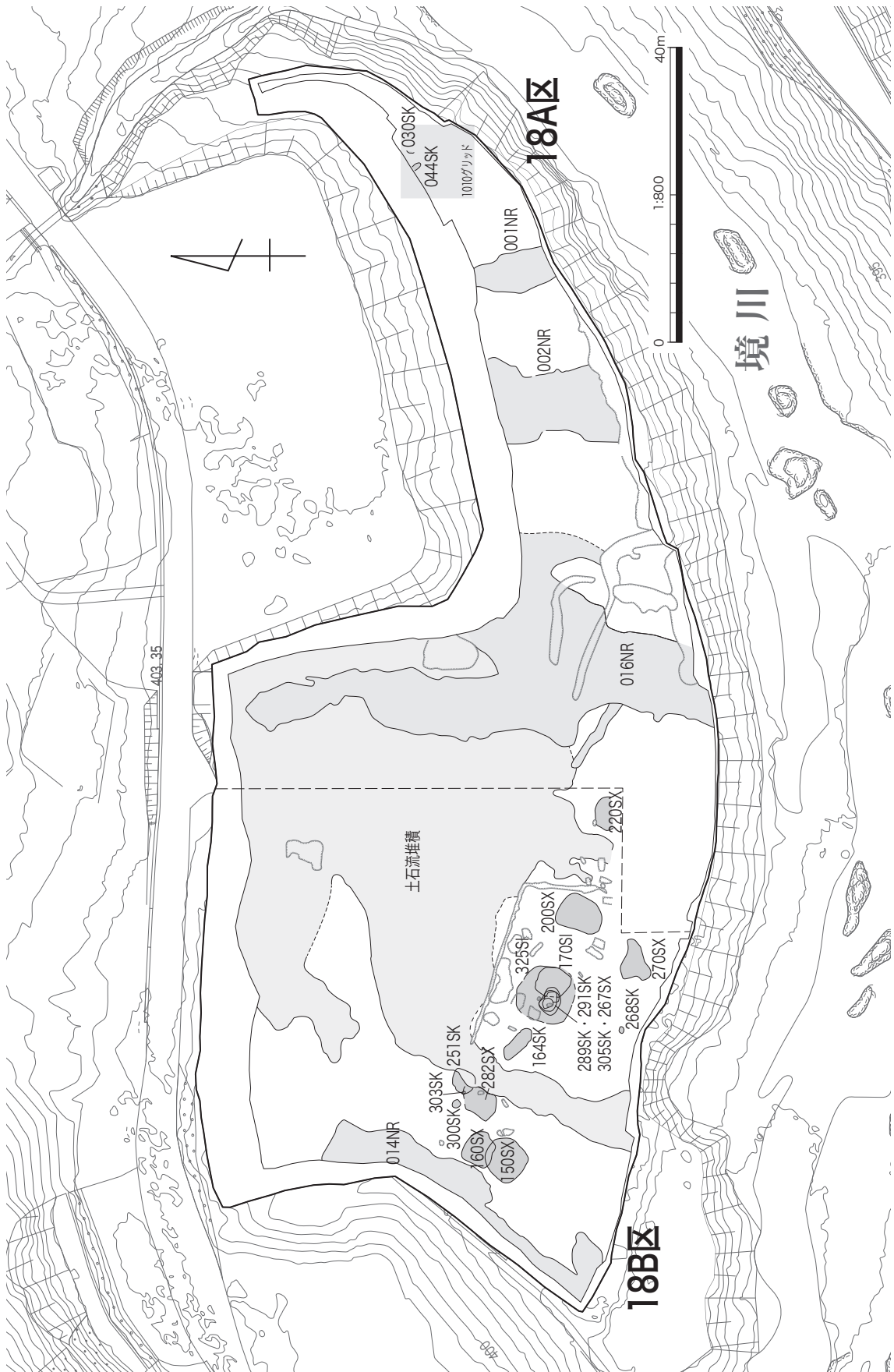
立地と環境 石原遺跡は、豊川上流の境川右岸に所在する(川向地区)。石原遺跡とその周辺では、主に境川右岸に発達した河岸段丘および沖積地からなる平坦面や緩斜面が分布しており、やや開けた谷地形となっている。このうち最上流の左岸に所在するマサノ沢遺跡では、平成29年度の発掘調査でハート形土偶が出土している。石原遺跡は、隣接する下延坂遺跡とともにマサノ沢遺跡の対岸に位置し、その範囲は、標高394～403mの緩斜面を中心に一部は北側の斜面(標高405～418m)にも及んでいる。これらの遺跡は、平成28年度に当センターによって範囲確認調査が行われている。

調査の概要 今年度発掘調査が行われた緩斜面は、地表面下約3mで片麻岩の岩盤となっている。その上層には、①角・円礫が多く混じる砂礫層の範囲と、②礫の少ない砂層の範囲とがある。前者は主に上流側に分布し、後者は下流側に分布する。特に縄文時代中期前半の竪穴建物跡などの遺構が集中して検出されたのは②の砂層頂部であるが、当該層は現河道に沿って発達した自然堤防とみられる。一方、当該地点から北側の斜面へ続く一帯は、砂層の上位に③長径15～50cmの角礫を多く含む粗粒砂が堆積している。当該層中には縄文土器や石器だけでなく、一部に近世後半の陶磁器類も含まれることから、縄文時代から近世後半までの間に複数回発生したとみられる土石流堆積に起因するものと考えられる。

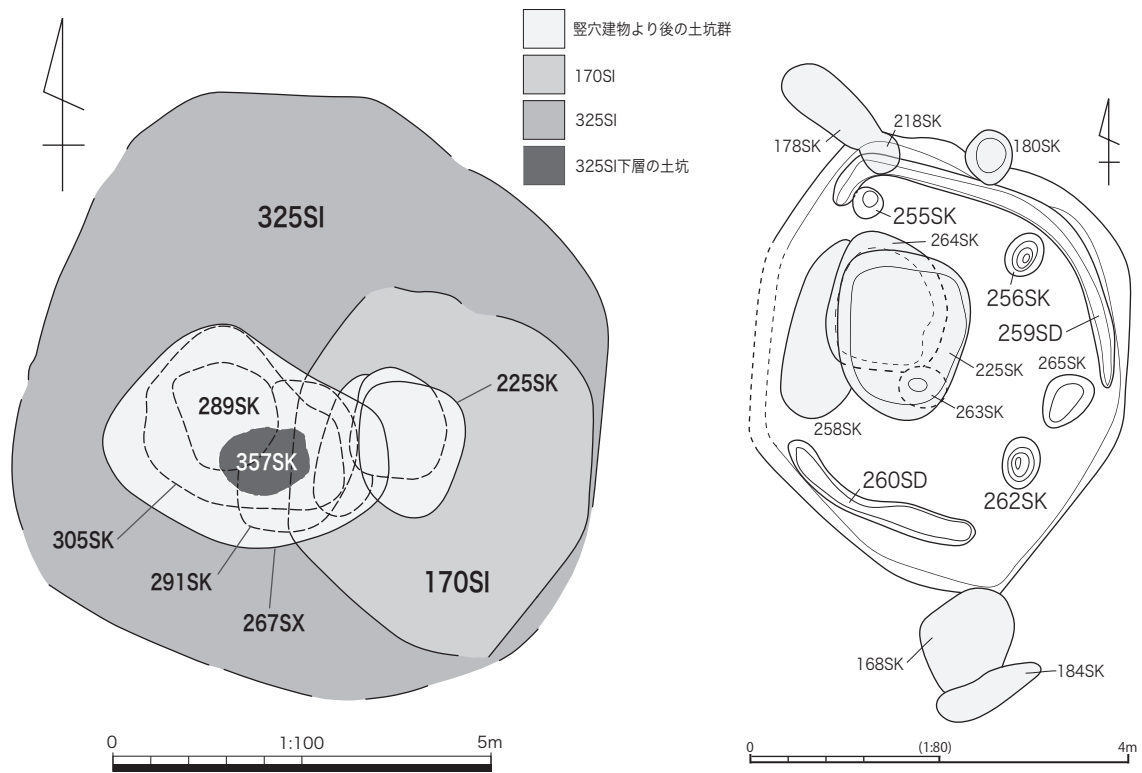
以上のように石原遺跡では大別して3種類の砂層がみられた。調査では、これに対応してA区南東部で①砂礫層、A区北西部およびB区北半部では③土石流堆積層、B区南半部では②砂層の各上面において遺構検出を行った。なお土石流は本来あった遺構面を破壊しているが、その端部では若干の下層遺構を検出することができた。(永井邦仁)

A 区 A区東端で、現代の造成土の下から暗褐色土の間層をもつ上下2層のシルト質の黒色砂層が検出された。このうち、上部黒色砂層からは、近世の陶磁器片や縄文土器片、剥片などが出土した。一方、下部黒色砂層の上面では土坑などの遺構を20基以上検出した。土坑内や下部黒色砂層中から、後期や晩期の土器片が出土しているため、遺構も当該期の可能性がある。特に1010グリットでは、遺構や遺物が良好な状態で検出された。

030SK 030SKは、下部黒色砂層上面から掘り込まれた土坑で、凝灰岩の剥片や石核が約30点出土した。これらの一部は接合関係にあることから、石器製作に関わる廃棄または埋納の可能性が高い。この土坑からは土器が出土していないため明確な時期は不明だが、周辺で出土している土器は縄文時代後期以降のものがほとんどであることから、この土坑も後期以降の可能性はある。

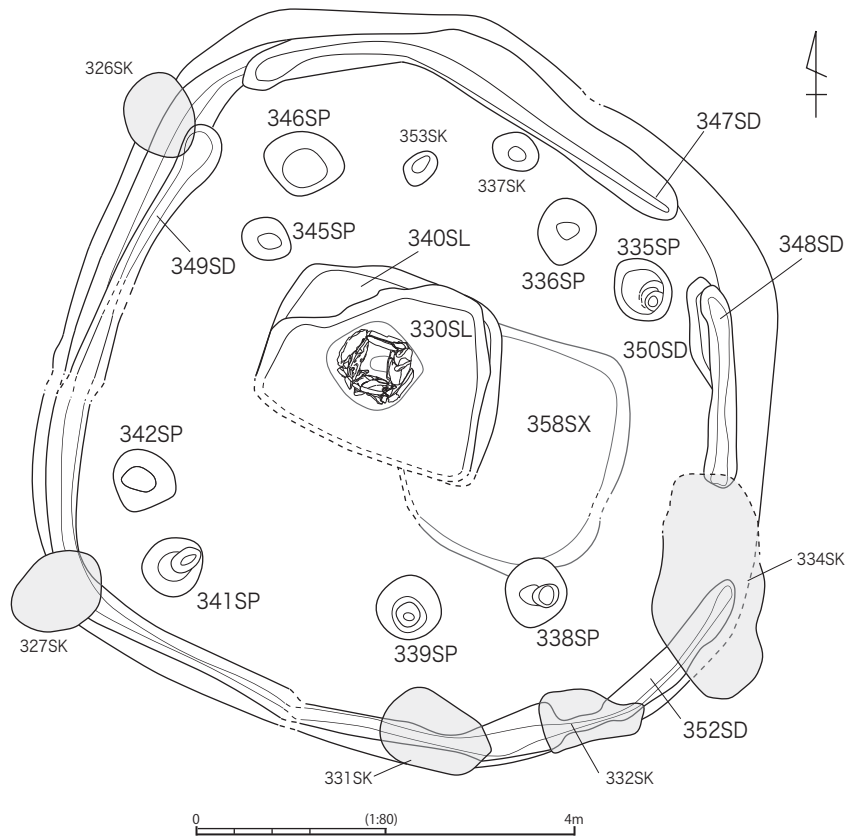


遺構全体図 (S=1/800)



竪穴建物跡170SI・325SIと各土坑群の重複関係

竪穴建物跡170SI



竪穴建物跡325SI

- 0 4 4 S K** 044SK は下部黒色砂層上面から掘り込まれた土坑で、縄文土器の口縁部が出土している。土器は土坑の検出面付近だけで出土している。土器の時期は縄文時代晩期である。
- 自然流路** 016NR は幅 4 ～ 28m、全長 64m 以上の自然流路である。先述のように石原遺跡では
- 0 1 6 N R** 広範囲にわたる土石流堆積があるが、016NR はその上面で検出されていることから、その最終段階と考えられる。016NR は、途中で屈曲や合流点を交えながら 18A 区西部を南北方向に横切っている。堆積層は直径 20cm 以上の角礫を多量に含む粗粒砂が主体で、土石流もしくは収束後の沢の様相を示している。その起点は、地形から類推すると遺跡北東部の緩斜面と考えられる。016NR からは黒曜石製の石鏃や塩基性岩製の磨製石斧などが出土しているが、いずれも摩滅や擦痕がみられるので、より上位の地点から流されてきた可能性が高い。
- B 区** B 区の北半部では、土石流堆積の上面で若干の土坑や溝状遺構が検出され、縄文土器小片などが出土している。一方、南半部では先述のように細粒砂主体の河川堆積が広がる。このうち川近くは耕作などにより削平されていたが、中期の縄文土器が出土する土坑 268SK など若干の遺構がある。その北側の一帯では、竪穴建物跡 2 基 (170SI・325SI) をはじめとする大小の土坑群が検出されている。170SI は 325SI の埋土に構築されたもので、さらにその埋土を掘り込む土坑群 (289SK、291SK など) が著しい重複をみせている。
- 1 5 0 S X** 150SX は直径約 5m、深さ 30cm の浅い窪地地形を呈する。検出時に遺物が多量に出土したが、下部では遺物がほとんど出土していない。これは、浅い窪地地形に遺物が二次堆積したためと考えられる。縄文土器の時期は縄文時代中期前半である。
- 1 7 0 S I** 170SI は直径約 3.8m の竪穴建物跡である。平面形はやや不整形を呈し、壁溝を伴っている。検出面からの深さは最大で約 0.2m と浅く、埋土の上から掘り込まれた土坑群 (225SK など) は床面を一部抉りこんでいる。そのため検出された柱穴は 3 基にとどまる。床面からは若干の炭化物が出土しているが炉跡は検出されなかった。出土遺物は早期後半の 1 点を含む少量の縄文土器や黒曜石の剥片などが出土している。出土土器から縄文時代中期前半と考えられる。
- 2 5 1 S K** 251SK からは、縄文時代中期前半の土器と溶結凝灰岩製のスクレイパーや石錐、剥片、磨石などが出土している。出土石器の一部に黒曜石が含まれているが、大半は溶結凝灰岩である。この時期の確実な共伴事例として注目される。
- 2 8 9 S K** 289SK からは、縄文時代中期前半の土器や黒曜石製の石鏃、剥片などがまとまって 20 点ほど出土したほか、炭化物も多く含まれていた。また、拳大以上の垂円礫や円礫が一定の高さでまとまって出土している。
- 2 9 1 S K** 291SK は 289SK に隣接する土坑で一部が切られる。こちらも 289SK と同様に縄文時代中期前半の土器や石器が出土する。289SK よりも黒曜石の剥片などが多く出土している。
- 3 0 0 S K** 300SK は縄文土器片が約 0.2m 四方の範囲でまとまって出土した土坑である。土器片は同一個体と考えられるが、口縁部付近に限られており、全体の復元には至っていない。時期は縄文時代中期前半である。土器だけでなく、剥片も出土している。
- 3 0 3 S K** 303SK は 300SK と同じく縄文土器がまとまって出土した土坑である。大きな土器片の下にも土器片が重なっている。おそらく横位で置かれた土器が土圧などで押しつぶされ、土器片が約 0.15m の範囲からまとまって出土したとみられる。

3 2 5 S I 325SIは直径約7.8mの竪穴建物跡である。平面形は隅丸方形に近い円形を呈する。重複関係にある170SIの下位にあり、部分的に間層が認められる。残存状況が良好で、検出面からの深さは最大で約1mである。床面には幅約0.2mの壁溝がめぐり、柱穴とみられる8基以上の土坑が検出されている。柱穴の一部には抜き取り痕も認められる。また中央には石囲炉がある。石囲炉は、まず床面に一辺約2.4mの方形の掘り方をもつ1時期目の340SLが構築される。その後、敷設された4つの棒状もしくは板状の礫の一部を据え直すとともに、その内側に礫を追加して2時期目の330SLが構築される。いずれも埋土に炭化物や焼土を多く含むが灰はみられなかった。以上のように石囲炉の改作が行われていることから、支柱穴もそれに対応して抜き取られていると考えられ、建て替えがあったと想定される。

ただし出土遺物は遺構の規模に対して少なく、若干の縄文土器や黒曜石の剥片が出土している。遺構の時期は出土土器から縄文時代中期前半と推測される。

ま と め 石原遺跡ではA区とB区で異なる時期の遺構や遺物が検出された。A区では縄文時代後期と晩期、B区では縄文時代中期前半が主体である。また、石器石材についても大きく様相が異なる。A区では凝灰岩や安山岩が主体であるのに対し、B区では溶結凝灰岩と凝灰岩が主体となっている。このことは、縄文時代の石材利用の変遷について考える上で、重要な事例となるであろう。

A区は、竪穴建物跡は検出できなかったが、約20基の土坑や遺物を含む自然流路が検出された。なかでも、030SKのように石器製作に関わる残滓が確認できたことは、周辺での活動を類推させる。また、その活動域が北側の緩斜面地に展開する可能性を、1010グリットで検出された土坑や自然流路に含まれる遺物が示唆している。

B区では、325SIの下層に黒色砂礫層がある。旧河道に伴う洪水性堆積により一部しか残存していなかったが、この層からも中期前半の土器や石器が出土する。ここで、325SIに関わる遺構の前後関係を整理してみると、黒色砂礫層→325SI→170SI→291SK→289SKとなる。興味深いことに、このいずれの層からも縄文時代中期前半の土器が出土している。しかも、325SIと170SIの間に約3cmの粗粒砂層が間層として入っている。このことから325SIが洪水等で埋没し、同一地点において復旧して170SIを構築した可能性がある。このことは、住居が埋没しても再度同じ場所で生活をするということが繰り返行われていたことを示唆する。

今回の調査では、東海地方でも珍しい縄文時代中期前半の竪穴建物跡などの遺構や遺物が出土した事例となった。また、縄文時代の石材利用の画期が中期にある可能性を今回の調査で見通すこともできた。

今後の課題として、整理作業等を通じて、B区の重複する遺構間における時期差やそこに含まれる遺物の差異を検討し、重複する竪穴建物跡どうしだけでなくそれより西側の251SKや300SK・303SKとどのように関係していたのかを考えていく必要がある。

(田中 良)



石原遺跡遠景(西から、B区調査時)



030SK遺物出土状況(南から)



044SK遺物出土状況(南西から)



016NR完掘状況(南から)



150SX検出状況(南から)



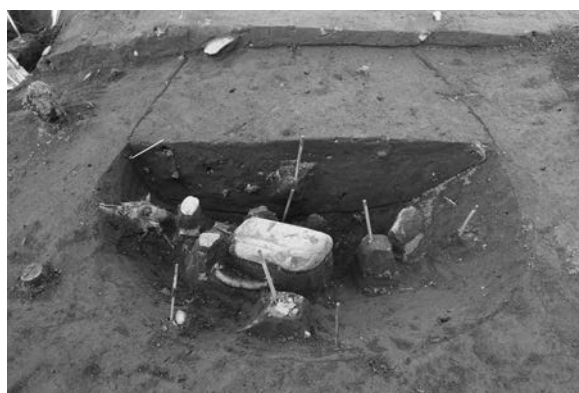
170SI完掘状況(南東から)



251SK遺物出土状況(南から)



289SK遺物出土状況(南から)



291SK土層断面と遺物出土状況(南から)



300SK検出状況(南から)



303SK土器出土状況(西から)



325SI完掘状況(南西から)



330SL(南西から)

たいら ハラビ平遺跡(本発掘調査A)

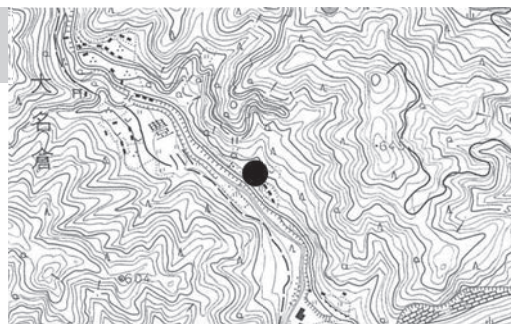
所在地 北設楽郡設楽町大名倉地内
(北緯35度6分25秒 東経137度33分1秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成30年12月

調査面積 10m²

担当者 鈴木正貴・永井邦仁・田中 良



調査地点 (1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境 ハラビ平遺跡は、大名倉地区の豊川上流左岸に位置する。遺跡は南西方向へひらけた上下2段の緩斜面に立地する。明治時代の地籍図によれば遺跡所在地の字名は「蕨平」で、遺跡名はこれが転訛したものと考えられる。また『北設楽郡史 原始～中世』(同編纂委員会1968)には「ワラビ平遺跡」として石斧や石鏃の出土があり縄文時代中期とされている。当センターでは、平成27年度に県道33号瀬戸設楽線付近の下位緩斜面(標高429～440m)で範囲確認調査を行い、谷地形と縄文土器を検出している。

調査の概要 今回は、上位の緩斜面(標高452～464m)が対象地となった。当該地点は現状で山林となっているが、以前は果樹園および水田として利用されていた。ここに5か所のトレンチ(TTと呼称、規模は1m×2m)を設定し、地山(風化した片麻岩を含む黄褐色粘土層上面)まで掘り下げて、土層の確認と遺構や遺物の検出を行った。

最西端のTT01からTT04までは、地表面下0.1～0.4mの厚さで黒褐色粘質土が堆積し、その下で地山が確認されている。したがってこれらのトレンチの地点は尾根筋に相当していると考えられる。このうちTT03では地山面上で小土坑2基が検出されている。一方TT05では、地表面より約1.5m下の地山まで角礫の少ない黒褐色土が厚く堆積している。このことから、当該地点では谷地形を埋めて水田としていることが明らかになった。谷地形はTT01～04の尾根筋とTT05東側の尾根筋との間にあり、地山面で比較すると高低差約1.7mの凹地である。なお、黒褐色土層からは遺物が出土していないので堆積時期を明らかにすることは難しいが、礫の混入が少ないことから土石流の可能性は低いと考えられる。

出土遺物 出土遺物は、TT02・03で石器剥片(凝灰岩・黒曜石)と灰釉陶器碗の小片が出土している。さらにTT03では山茶碗類小碗、瀬戸・美濃窯産陶器(播鉢など)、縄文土器が出土している。TT04では近世の瀬戸・美濃窯産陶器碗が出土している。

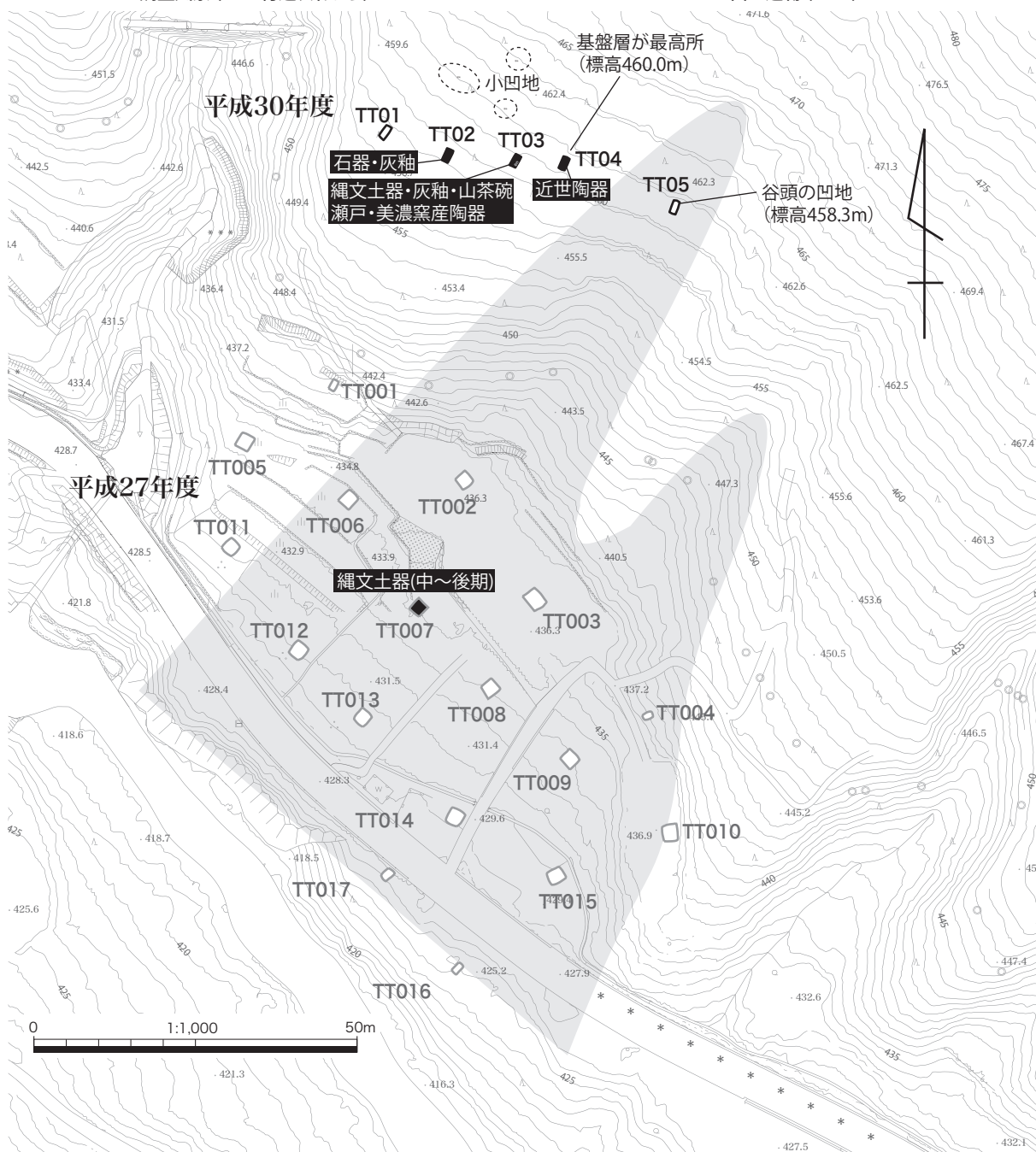
まとめ 以上の調査結果から、上位の緩斜面では縄文時代と平安時代～戦国時代を中心とする土地利用があったことが想定される。また、地表面において直径約5mの凹地が数か所でみられる点も注意を要する。なお平成27年度の範囲確認調査では、下位の緩斜面の大半が谷地形(谷1・2)であることが想定されている。谷1はTT05付近に想定される谷地形の下方延長と考えられるが、谷1では土石流堆積とそ中で縄文土器片が検出されているので、層位の連続性は認めがたい。
(永井邦仁)



調査風景 (TT03付近、東から)



出土遺物 (TT03)



調査の概要 (S=1/1000)

なかむら

中村遺跡(本発掘調査A)

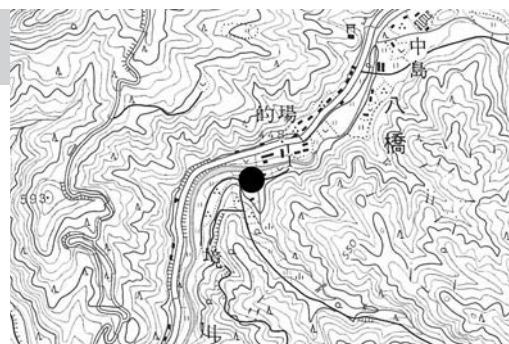
所在地 北設楽郡設楽町八橋字道上
(北緯35度7分41秒 東経137度35分16秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成30年12月

調査面積 20㎡

担当者 鈴木正貴・永井邦仁・田中 良



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じて、当センターが委託を受けて実施した。調査は、1m×2mのテストトレンチを6ヵ所と2m×2mのテストトレンチを2ヵ所の合計8ヵ所を設定して行った。

立地と環境 遺跡は、豊川支流の境川上流右岸に所在する(八橋地区)。境川がつくる幅約150mの谷地形の北縁を北東から南西方向に伊那街道が延びており、その沿道に八橋地区の集落が展開する環境にある。街道は標高449～452mにあり、遺跡はそれを境として北西側の斜面地(標高457～472m)と南東側の平坦面(標高445～452m)に立地する。愛知県埋蔵文化財センターが平成21年度に実施した調査では、南東側の平坦面から平安時代から江戸時代までの遺物が出土している。

調査の概要 今回の調査は、北西側の斜面地でおこなった。TT01～TT04では、基盤層まで約2mと深く、TT02で摩滅した土器細片が出土したが、遺構は検出されず、耕作等に伴う攪乱が確認された。TT05とTT06では約30cmほどで基盤層に達したが、遺構や遺物は検出されなかった。TT07とTT08は平場に近い状態で、TT08からは中世の山茶碗や戦国時代の播鉢が出土したが、基盤層直上に鉄製のアンカーが埋め込まれていた。

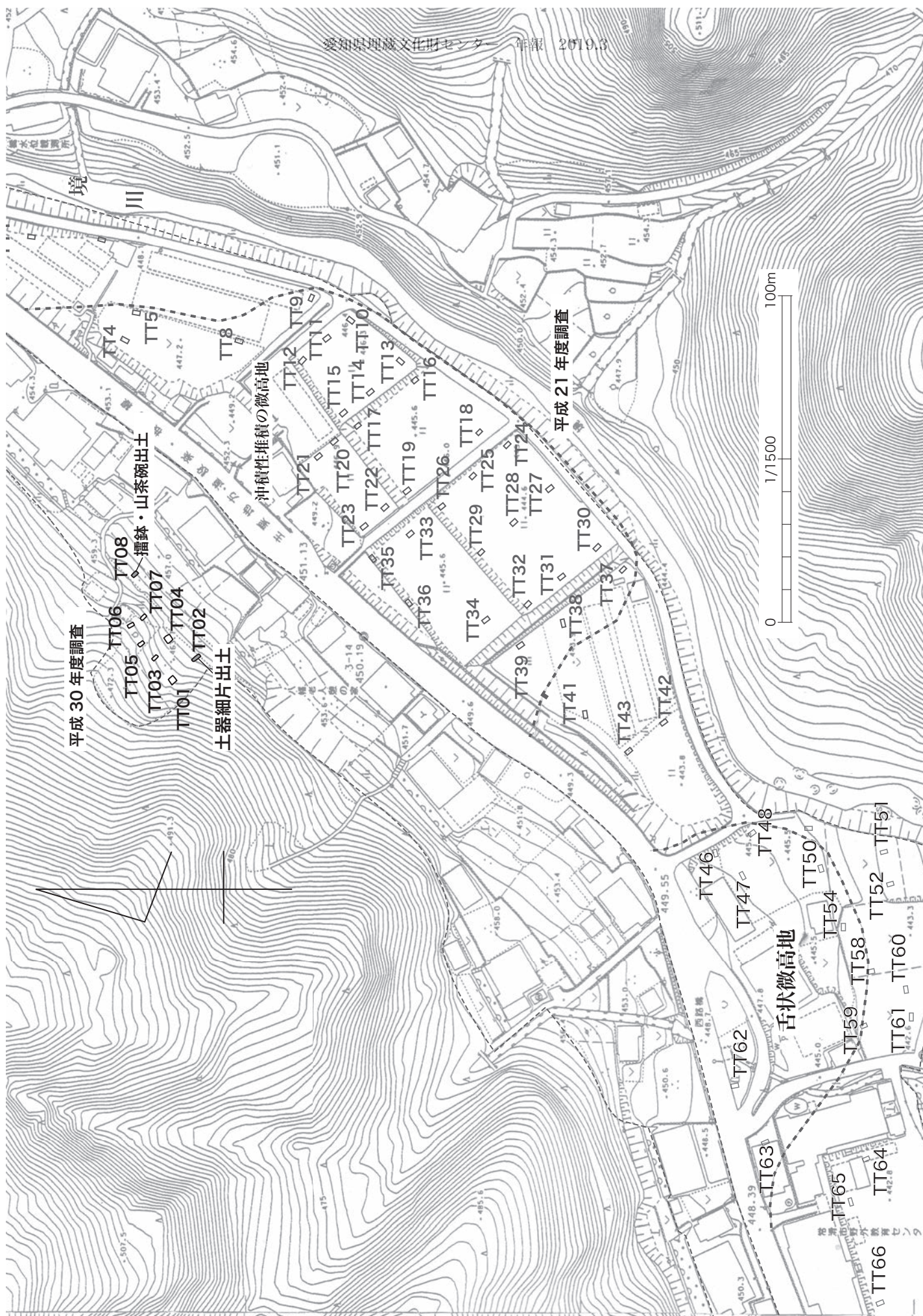
まとめ 以上の結果、当該地点では遺構や遺物包含層が検出されず、遺物も攪乱の影響を受けていることを確認した。耕作地造成による改変を受けており、遺跡が残存していない可能性が高い。(田中 良)



完掘状況(TT08)



TT08の出土遺物(山茶碗(上)、播鉢(下))



調査の概要 (S=1/1500)

III. 刊行報告書抄録

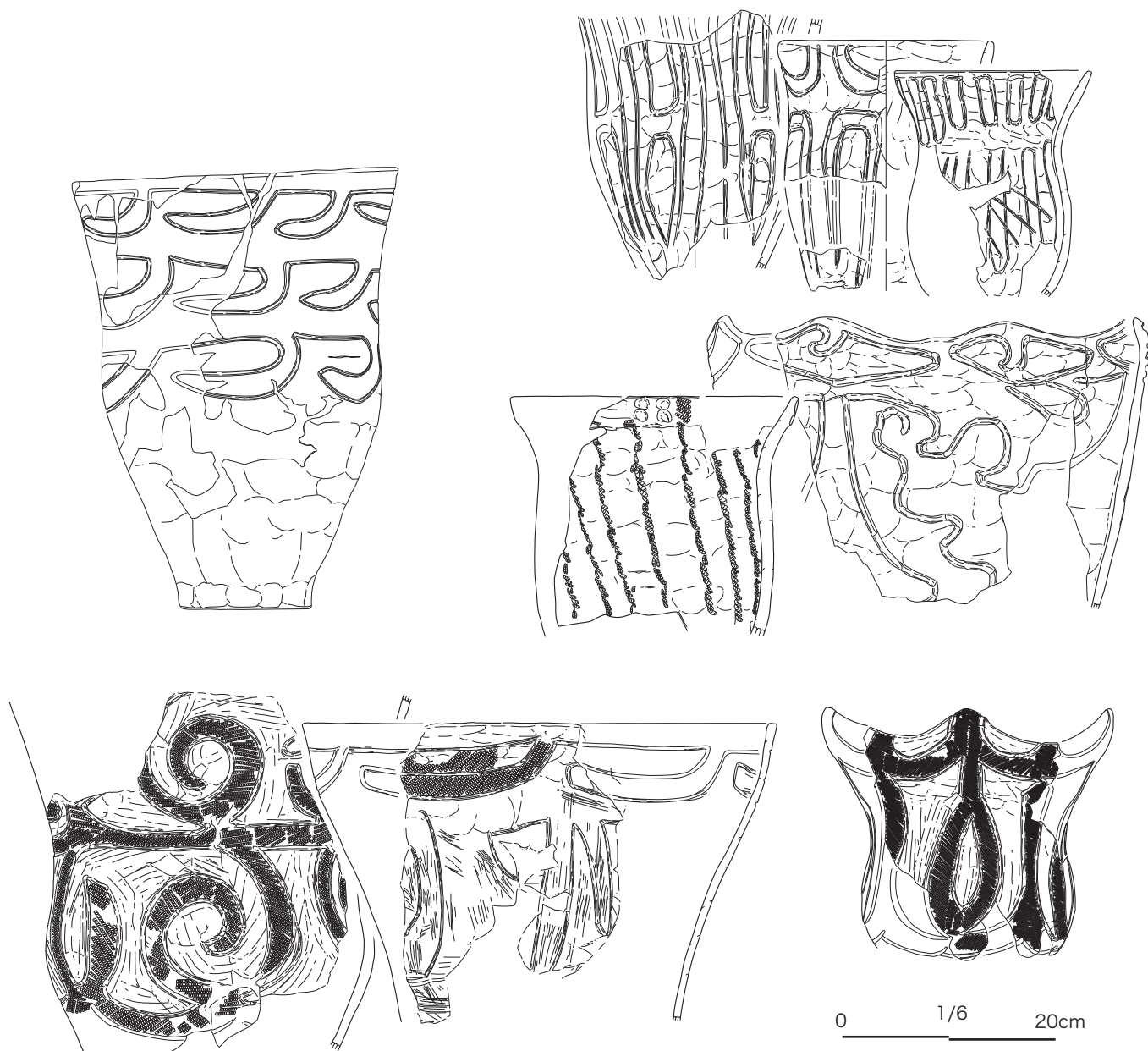
第211集 西地・東地遺跡

設楽ダム関連事業に伴い、近年、各遺跡で発掘調査が継続して行われている。発掘調査では、話題性のある様々な新たな発見があり、これまでも本誌に掲載されてきた。本報告は、本格的な整理調査を経て、その成果を公開・刊行する第1冊目となった。

調査は平成26・28年度の2回にわたって行われた。総調査面積は4,560㎡、総出土コンテナ数は238箱である。

西地・東地遺跡では、縄文時代後期初頭を主体とする、竪穴建物と貯蔵穴などの土坑群で構成される集落跡が見つかった。出土遺物も土器・石器が多量に出土し、特に植物質食糧を加工するための磨石・敲石類や石皿・台石類の卓越した出土量が注目される。こぶし大ほどの黒曜石の石核の出土や、下伊那地域との関連性が考えられる土器の出土など、当地は当時の活動の場として、中心的な役割を果たしていたものと考えられる。

(川添和暁)



西地・東地遺跡出土 主要土器

報告書抄録

ふりがな	にしじ・ひがしじ							
書 名	西地・東地遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第211集							
編著者名	川添和暁、鈴木正貴、堀木真美子、 森 将志、小林克也、バンダリ スダルシャン、佐々木由香、山形秀樹、中村賢太郎、 伊藤 茂、安昭炫、佐藤正教、廣田正史、小林紘一、Zaur Lomtadze、 Ineza Jorjoliani （株式会社 パレオ・ラボ）、 井上 巖 （株式会社 第四紀地質研究所）							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2019年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にしじ・ひがしじいせき 西地・東地遺跡	あいちけんきたしたらぎん 愛知県北設楽郡 したらちようおおなぐら 設楽町大名倉	23561	700152	35度 11分 14秒	137度 54分 36秒	2014.05.19～ 2016.12.8	4,560	設楽ダム 工事関連 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西地・東地遺跡	集落	縄文時代	竪穴建物跡、炉跡、 埋甕、貯蔵穴など土坑、 土器埋設遺構		縄文土器、土製品 石器、石製品		後期初頭を主体と する集落跡	
		古代			須恵器・灰釉陶器			
		中世・戦国期 ～近世	竪穴状遺構、炉跡、 土坑、 埋葬遺構		瀬戸・美濃産陶器、 石器、鉄滓、 人骨、キセル、銅銭		野鍛冶関連遺構	
文書番号		発掘届出(26埋セ第5号 2014.4.8、 28埋セ第35-1号・第35-2号 2016.7.1) 通知(26教生第237号 2014.4.8、 28教生第1161号 2016.7.14) 終了届・保管証・発見届(26埋セ第108号 2015.1.23、 28埋セ第78号 2016.12.14) 鑑定結果通知(26教生第3226号 2015.3.31、 28教生第2906号 2016.12.22)						
要約	寒狭川東岸の緩斜面上に立地している本遺跡では、縄文時代、古代、そして中世・戦国期から近世にかけての遺構・遺物が調査された。そのなかでも、竪穴建物跡と土坑群で構成される、縄文時代後期初頭主体の集落跡が全面調査されたことは、特に注目される。一括廃棄された遺物群の存在もさることながら、出土土器の遺構・包含層の形成状況と出土遺物との対比を行えたことは、今後の縄文時代集落研究に寄与するデータとなろう。中世・戦国期から近世にかけては、野鍛冶関連の遺構群が見つかっており、山間部での活動の様子が窺えられる好資料となった。							

第212集 岡山南遺跡

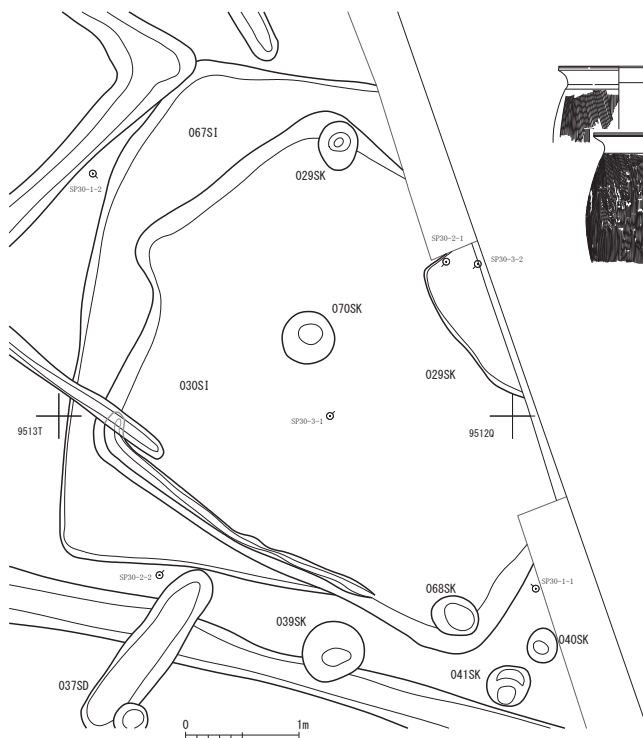
西尾市吉良町に所在する岡山南遺跡は、矢作川下流域の沖積低地に立地する。遺跡のすぐ北側には幡豆山塊から西へのびた丘陵部の先端付近、通称「岡山」があり、この丘陵上には弥生時代中期に成立した環濠集落である中根山遺跡や、古墳時代に続く砦山遺跡、若宮古墳群などの遺跡が知られている。

調査により弥生中期後半の土器や古墳時代前期の竪穴建物を含む遺構群が検出され、また古墳時代後期から平安時代の溝・井戸・建物跡などが展開する集落域の一端が確認された。これらの資料は沖積地への開発の進展を具体的に示すものであり、立地の異なる岡山丘陵上の遺跡群との関連性が注目される。

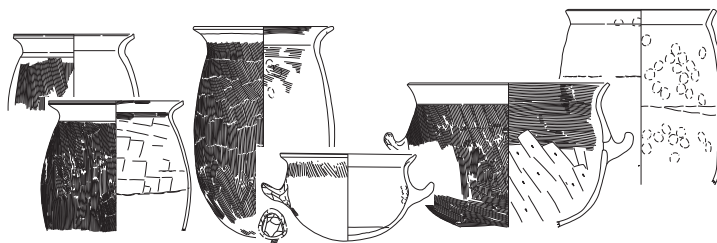
(武部真木)



岡山南遺跡 16E区033SU出土 土器



岡山南遺跡 11B区古代竪穴建物030S1



岡山南遺跡出土の古代の土器 甕・鍋類



岡山南遺跡 16D区090SK出土 銅

報告書抄録

ふりがな		おかやまみなみいせき						
書 名		岡山南遺跡						
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第212集						
編著者名		武部真木(編)・宮腰健司・池本正明・鈴木正貴・樋上 昇・鬼頭剛・藤根 久・米田恭子						
編集機関		公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161						
発行年月日		西暦 2019年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
おかやまみなみいせき 岡山南遺跡	あいちけん にしおし 愛知県西尾市 きらちょう 吉良町	23213	590016	34度 50分 15秒	137度 04分 38秒	2011.12.～ 2012.2. 2012.04.～07. 2015.06.～09. 2016.08.～12.	4,100	道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岡山南遺跡	集落	古墳時代 ～ 平安時代 鎌倉時代 江戸時代	掘立柱建物跡、 溝、井戸、土坑等 自然流路跡		土師器、須恵器、石器、 灰釉陶器、山茶碗、 瀬戸・美濃窯産陶器、 木製品、金属製品、 石製品等		下層自然流路で 古墳時代木製品 を検出	
文書番号	発掘届出 (23埋セ第92号,2011.10.5/第180号,2012.3.23/27埋セ第1-1号,2015.4.7/28埋セ第38号,2016.7.6) 通知(23教生第1604号,2011.10.12/24教生第178号,2012.4.10 /27教生第171号,2015.4.20/28教生第1262号,2016.7.19) 終了届・保管証・発見届(23埋セ第164号,2012.3.1/24埋セ第66号,2012.8.6 /27埋セ第72号,2015.9.14/28埋セ第74号,2016.11.21) 鑑定結果通知(23教生第2897号,2012.3.23/24教生第1246号,2012.8.22 /27教生第1745号,2015.10.5/28教生第3355号,2017.2.15)							
要約	本遺跡は矢作古川の下流左岸域、岡山丘陵の南側の沖積地に立地する集落遺跡である。丘陵上に展開した弥生時代集落遺跡や古墳群との関連性が注目されており、調査では弥生土器や古墳時代前期から中期の土師器・木製品など多様な遺物が得られた。低地部の開発が始まっていたこと、また飛鳥・奈良時代から平安時代に営まれた集落の一端が明らかとなった。							

IV. 普及・公開活動の記録

平成30年度埋蔵文化財展等の活動について

1 概要

2019年4月施行の文化財保護法改正に向けて、文化財の活用が求められている。愛知県埋蔵文化財センターは、発掘調査した成果を広く県民に公開活用するための一環として、埋蔵文化財展をはじめ様々な普及事業を実施している。

2018年度は、4月に「やとみ新発見展！2018」&春の特別公開を県調査センターと共催した。9月から10月にかけて清須市主催『きよす歴史フェア』の関連事業として、「板にこめた想い」と「埋文市民大学inきよす」、また『きよす歴史フェア』当日は、ワークショップなどを実施した。

2 春の埋蔵文化財展「やとみ新発見展！2018」&春の特別公開

- (1) 会場：愛知県埋蔵文化財調査センター
 - (2) 会期：平成30年4月4日（水）から13日（金）
 - (3) 内容
- 埋文桜ニュース発行



▲桜ニュース



春の埋文展 入り口



キネクトゲーム



収蔵庫C 見学の様子



ツボ釣り

○展示

2階収蔵庫C

「やとみ新発見展！2018」

「食と文化の考古学 煮炊きの道具の変遷」

2階資料管理閲覧室

「石の道具の歴史」展

配布資料：埋文桜ニュース（遺跡の概要説明＋春の特別公開解説＋本年度イベント案内）

（4）考古楽縁日

弥富市社会教育センター（弥富市主催）で開催した「やとみ春まつり」に合わせて4月7日（土）・8日（日）はワークショップの一環として、キネクトゲーム・ツボ釣りを実施した。

○キネクトゲーム：参加者数242名（2日間）

○ツボ釣り：参加者数382名（2日間）

（5）その他

期間中、県埋蔵文化財調査センターは春の特別公開として朝日遺跡出土品から国の重要文化財を4点展示した。また、考古楽縁日当日は輪投げと火起こしマスターを実施した。入館者数は縁日当日が563名、縁日以外の日が210名。



▲秋の埋蔵文化財展 ちらし

3 秋の埋蔵文化財展

『きよす歴史フェア』関連事業

（1）関連事業1 秋の埋蔵文化財展

「板にこめた想い」こけら経と清洲城下町遺跡

会場：清須市歴史資料展示室（清須市図書館）

会期：9月15日（土）から12月16日（日）

内容：清須市教育委員会と共催。平成29年度までに保存処理が終了した清洲城下町遺跡の柿経、塔婆、位牌を中心に展示。

その他：会期中に展示解説を9月17日（月・祝）と12月1日（土）、両日ともに午前11時からと午後2時からの2回開催。

入場者数：のべ4,354名（展示解説：計30名）

（2）関連事業2 「埋文市民大学inきよす」

会場：清須市清洲市民センター307研修室

会期：11月10日（土）「弥生の日」

11月11日（日）「戦国の日」

両日とも午前と午後の2回実施。

清須市内の遺跡出土品を用いた講座と



歴史講談



トークイベント

ワークショップ(詳細は後述)。

(3)「きよす歴史フェア」参画事業

会場：清須市清洲市民センター

会期：10月20日(土)・21日(土)

内容と参加者数：キネクトゲーム(217名)、
銅鐸鑄込み体験(120名)

(4)「きよす歴史フェア」

愛知県教委・清須市教委主催事業

・県教育委員会主催事業



鑄込み体験



鑄込み体験

○朝日遺跡弥生生活体験講座

「Dokiドキ朝日遺跡弥生体験」

内容：火起こし、勾玉づくり、土器作りのワークショップ

○朝日遺跡サポーターによるワークショップ

内容：拓本と缶バッジ製作のワークショップ

○朝日遺跡PRパネル展示

・清須市教育委員会主催事業

○旭堂南海 きよす歴史講談

20日(土) 午後1時半から

内容：清須市芸術劇場にて講談師旭堂南海氏による歴史講談「朝日銅鐸発掘物語」・「信長講談」とトークイベントを実施(参加者150名)。

○清須市ワークショップ

内容：弥生人なりきり体験と写真撮影、弥生アクセサリー作り

以上、きよす歴史フェアに関連するイベントの参加者総数は1,873名であった。



鑄込み体験



キネクトゲーム



清須市 やよいアクセサリー作り

秋の埋蔵文化財展 『きよす歴史フェア』関連事業2 「埋文市民大学inきよす」について

「埋文市民大学」は考古学の「研究を体験する」ワークショップとして、昨年度から開催している。講師によるレクチャーを最小限とし、与えられたテーマについて、参加者全員が実際の遺物に触れ、観察し、考察し、自由な討論を行うものである。本年度は、秋の埋蔵文化財展の関連事業として開催した。

会場：清須市清洲市民センター307研修

会期：11月10日(土)「弥生の日」・11月11日(日)「戦国の日」 両日とも午前と午後の2回実施。

○弥生の日 平成30年11月10日(土曜日) 参加者：17名(午前14名、午後3名)

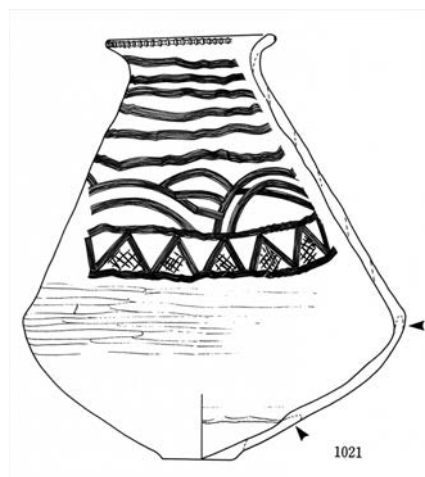
弥生のは、清須市に所在する朝日遺跡、廻間遺跡と隣接するあま市に所在する阿弥陀寺遺跡、その他に月縄手遺跡、麻生田大橋遺跡の弥生土器を17点持参し、市民大学を実施した。テーマは2つ用意した。前半のテーマは、弥生土器12点の『時期』。実物を15分程観察した後、各自の基準により弥生土器の時期区分の基準を考えた。その基準は、土器の色調や器壁の厚さ、胎土の粒度などにおよび、多様な分類案が発表された。また後半のテーマは弥生土器の『美しさ』とした。参加者各自で「美しい(お気に入り)」の土器を選び、その「美しさの評価」(参加者が採取して良いドングリの数量で表現した)とその理由を考えて頂いた。そして選択した弥生土器の「美しさ」を各自でピーアールし、参加者どうしで巴型銅器のシール(各参加者3票)で投票を行った。「美しさ」のピーアールでは、全て美しいという意見や、土器の形の安定性や外形のラインの良さ、施文方法から見た文様の緻密さ、土器の色調(赤色)の美しさ、文様表現の自由・奔放性、文様の位置とその強調性、文様に見る物語性、土器の機能性などに重点が置かれていた。その後、参加者どうしの自由な意見交換が行われた。

○戦国の日 平成30年11月11日(日曜日) 参加者：13名(午前9名、午後4名)

参加者には清洲城下町遺跡出土品の土器・陶磁器類の『分類』について、実際に手に取って観察してもらいながらグループごとに自由な視点で考えていただいた。「分類」については、形態や材質、使い方、国内・国外の産地、使用者の階層を想定したものなど様々な「分類」が発表された。自由な意見や感想を交えながら、「清須」の町で暮らした戦国時代の人々について、具体的にイメージしてもらう機会となった。



「美しさ」をテーマに観察された阿弥陀寺遺跡出土の太頸壺



第11集 阿弥陀寺遺跡 (1990年発行)より

*この土器の表面にある文様から、「空があり、山があり、田園風景があり、とてもどかな風景が描かれているので、『美しい。』」との意見をいただいた。



市民大学 弥生の日



市民大学 弥生の日



市民大学 弥生の日



市民大学 弥生の日



市民大学 戦国の日



市民大学 戦国の日



市民大学 戦国の日



市民大学 戦国の日

連続歴史講座

目的：当センターの事業を紹介し、埋蔵文化財の調査について理解を深めてもらう。

場所：愛知県埋蔵文化財調査センター 2階 研修室

時間：いずれも午後1時より開催。参加費は無料。

	日時	タイトル	講師	参加者数
第1回	9月8日	縄文時代の終活	永井宏幸	24名
第2回	9月22日	弥生時代の墓	宮腰健司	30名
第3回	10月6日	古墳時代の古墳、お墓、エトセトラ	早野浩二	31名
第4回	10月27日	焔の送り、石の加護	池本正明	17名

本年度の連続歴史講座は『墓制の考古学』というテーマで9月から10月にかけて4回開催した。第2回と第3回は30名以上となり、例年にくらべて多くの参加者を得られた。弥生時代と古墳時代の回は、内容的に一般に興味を持たれるものであり、今後はより多くの参加者を得られるようなテーマや内容設定が必要である。



▲歴史講座の風景

[illegible]

バックヤードツアーと考古学体験

目的：当センターの事業の紹介し、埋蔵文化財の調査について理解を深める。

場所：愛知県埋蔵文化財調査センター

日時：10月26日（金）、11月2日（金）

両日とも午前10時30分よりバックヤードツアー、午後1時より考古学体験。

参加費は無料、事前申し込みを行ったが、当日参加も可能とした。

参加者数：10月26日（金）：バックヤードツアー 8名、考古学体験 9名

11月 2日（金）：バックヤードツアー 未開催、考古学体験 4名

午前に開催するバックヤードツアーは10月26日（金）のみ実施。ツアーでは、遺跡の発掘調査現場から整理作業に移る仕事の流れと、午後からの土器・陶磁器の接合の考古学体験を意識した館案内を行い、最後に常設展の展示解説を行った。

午後からの考古学体験は、10月26日（金）が土器・陶磁器の遺物接合体験、11月2日（金）が遺物の写真撮影を行った。土器・陶磁器の接合体験では、発掘調査が完了したばかりの清洲城下町遺跡の遺物についてチャレンジしていただいた。遺物の接合をしながら、清洲城下町遺跡の紹介や、接合している土器や陶磁器の解説を行った。最後に接合した土器や陶磁器との記念撮影を行い終了した。

遺物の写真撮影の体験では、朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡・廻間遺跡・麻生田大橋遺跡・月繩手遺跡から出土した縄文時代晩期から古墳時代前期にかけての弥生土器・縄文土器・古式土師器24点を撮影用の土器として準備した。土器と写真撮影の方法について解説をしながら、参加者の撮影したい土器を1点選び、まず単品で写真撮影を各自で行った。その後参加者の方が別に選んだ土器を1点ずつ持ち寄り、集合写真を撮影した。集合写真では、最後に撮影する方は、土器のポーズを変える工夫もされていた。



バックヤードツアーa: 写場の見学



バックヤードb: 遺物整理室の見学



考古学体験a: 遺物の接合体験



考古学体験b: 集合写真の撮影

第7回 考古学セミナー「あいちの考古学2018」の記録

概要:考古学セミナー「あいちの考古学」は、愛知県内および近隣地域で活動する県・市町村教育委員会、公益財団法人、大学、特定非営利活動法人(NPO)、研究グループ、関連企業などが一堂に会して遺跡調査と考古学に関係する研究成果を広く一般に公開し情報を共有することを目的に、平成24年度より開催している。名古屋市博物館が会場となって5年目となる今回も継続参加者を含む多数の来場者で賑わった。

主催:名古屋市博物館・愛知県埋蔵文化財センター

日時:平成 30年11月17日(土) 午後1時から午後4時20分

11月18日(日) 午前10時から午後3時30分

会場:名古屋市博物館 講堂・展示説明室

参加者数:11月17日(土)111名、11月18日(日)193名、合計304名

出展団体・個人:プレゼンテーション10、ポスターセッション17(エントリー制)

講演:中塚 武(名古屋大学大学院環境学研究科/総合地球環境学研究所 教授)

セッション:原田 幹(愛知県教育委員会)ほか3名

配布資料:『あいちの考古学2018』400部(無償配布)

◎11月17日(土) 午後1時から午後4時20分

<プレゼンテーション>

13:10～13:30「敷き詰められた山茶碗～大府市 上入道古窯発掘調査～」白樫 淳(株式会社アコード)

13:30～13:50「古城山窯跡第2次発掘調査報告」高野夏姫(愛知学院大学大学院文学研究科)

13:50～14:10「愛知県新城市萩平遺跡A地点隣接地第6次調査の成果」

野村啓輔(愛知学院大学大学院文学研究科)

14:50～15:10「古代寺院の基壇外装」石原 唯(豊橋市文化財センター)

15:10～15:30「尾張国・三河国における陶硯の使用状況」井上隼多(名古屋大学大学院人文学研究科)

15:40～16:00「史跡貝殻山貝塚の調査成果」成瀬友弘(愛知県埋蔵文化財調査センター)

16:00～16:20「東海地方を中心とした縄文時代草創期の編年」田中 良(愛知県埋蔵文化財センター)

◎12月3日(日) 午前10時から午後4時

<プレゼンテーション>

10:10～10:30「犬山焼にみる『仙境図大皿』を読み解く」佐久間真子(愛知県陶磁美術館)

10:30～10:50「吉田城址の確認調査について」中川 永(豊橋市文化財センター)

10:50～11:10「三重県四日市市 国史跡 久留倍官衙遺跡公園」清水政宏(四日市市教育委員会)

<セッション主旨説明>

12:30～12:40趣旨説明 樋上 昇(愛知県埋蔵文化財センター)

<講演>

12:40～13:40「日本史の命運を左右した気候変動—樹木年輪の酸素同位体比が語るもの—」

中塚 武(名古屋大学大学院環境学研究科/総合地球環境学研究所)

<セッション>

13:40～14:00基調報告1「朝日遺跡の変遷」原田 幹(愛知県教育委員会)

14:00～14:20基調報告2「西志賀遺跡とその周辺」永井宏幸(愛知県埋蔵文化財センター)

14:20～14:40基調報告3「名古屋台地の弥生時代集落—高蔵遺跡・見晴台遺跡を中心に—」
酒井将史(名古屋市教育委員会)

14:40～15:30パネルディスカッション

<ポスターセッション・出版物案内>(11月17日・18日開催)

(1)「設楽ダム事業に伴う発掘調査2018」愛知県埋蔵文化財センター

(2)「赤日子遺跡の出土遺物」松田 繁(蒲郡市博物館)

(3)「桜佐下五反田遺跡について」銅坂有紗(春日井市教育委員会)

(4)「尾北窯出土の白瓷の基礎的研究」大西 遼(愛知県陶磁美術館)

(5)「平成29年度畑間・東畑遺跡の発掘調査成果について」宮澤浩司(東海市教育委員会)

(6)「安城市指定史跡 塚越古墳の発掘調査成果について」川崎みどり(安城市埋蔵文化財センター)

(7)「鈴鹿市上箕田遺跡の絵画土器」吉田真由美(鈴鹿市考古博物館)

(8)「犬山焼にみる『仙境図大皿』を読み解く」

犬山焼ミュージアム(青木修 井上あゆこ 佐久間真子 中野耕司 鈴木智恵 安藤 悟)

(9)「入鹿切れから150年,その被害を再考する」大塚友恵(NPO 法人ニワ里ねっと)

(10)「2018年度 豊田市伊保古瓦出土地(伊保白鳳寺)の発掘調査」

林 順(名古屋大学大学院人文学研究科)

(11)「敷き詰められた山茶碗～大府市 上入道古窯発掘調査～」白樫 淳(株式会社アコード)

(12)「土器圧痕レプリカ ワークショップ」小林克也(株式会社パレオ・ラボ)

(13)「物の形の意味を探る—民具における樹種と構造計算からの検討と出土遺物への応用—」

高橋 敦(株式会社 古生態研究所) 久保光徳(千葉大学) 桃井宏和(元興寺文化財研究所)

(14)「デジタルカメラを使用した3Dモデル作成と文化財実測への活用」加藤 達(株式会社 CUBIC)

(15)「文化財カード『v.式カード』の制作と今後の展望について」

西村誠治(ナカシャクリエティブ株式会社) 赤塚次郎(NPO 法人ニワ里ねっと)

植木 萌(ナカシャクリエティブ株式会社)

(16)愛知県 県史編さん室『愛知県史』のご案内

(17)考古学フォーラム「考古学フォーラムのご案内」



プレゼンテーション風景



ポスターセッション風景

V. 埋蔵文化財センターの活動

資料の貸出・提供

貸出先	目的	遺跡名	貸出・提出資料		日付
中日新聞福沢通信部	中日新聞尾張版企画「歴史探訪」に使用するため。	朝日遺跡	第154 集 朝日遺跡(総集編) 05C区 (154-012.jpg)	1 点	2018/4/6
愛知県陶磁美術館	特別企画展「知られざる古代の名陶 猿投窯」に使用するため。	志賀公園遺跡	第90 集 志賀公園遺跡 E-177 他 遺物12 点に関わる写真	15 点	2018/4/13
瀬戸市歴史文化基本構想を活用した観光拠点形成のための協議会	平成30 年度企画展「中世山茶碗展」に使用するため。	松河戸遺跡	第48集 松河戸遺跡 048-019.jpg 048-020.jpg	2 点	2018/4/18
豊橋市教育委員会	展示会「みかわの城 吉田城と天下人」に使用するため。	清洲城下町遺跡	第99 集 清洲城下町遺跡VIII 写真図版1,2 掲載写真 2 点 織豊期清洲城下町概要図 1 点	3 点	2018/4/18
岡崎市	平成30 年度 鹿乗川改修に関する要望書の資料に使用するため。	下懸・寄島遺跡	下懸・寄島遺跡 発掘通信 (2017. 2.16 発行) 掲載 調査地点遠景 (南西から) 1 点	1 点	2018/4/23
愛知県総務部	平成29 年度刊行「愛知県史 通史編 3 中世2・織豊」の紹介展示に使用するため。	清洲城下町遺跡	清洲城下町遺跡の噴砂の地層 写真	1 点	2018/5/10
新城市教育委員会	新城市長篠城址史跡保存館において 中山砦跡出土の鉄鍬を展示する際に使用するため。	中山砦跡	第193 集 中山砦跡 掲載の図面および写真	11 点	2018/5/16
公益財団法人土岐市文化振興事業団	特別展『瀬戸物として売られた美濃焼 江戸時代の焼物生産と販売』に利用するため。	朝日遺跡	第3 集 勝川遺跡 図版13 1 上面遺構(003-005) 1 点 勝川遺跡 図版15 2 SE11 SX21 (003-011) 1 点 第15 集 名古屋城三の丸遺跡 I 調査区上空より名古屋城(015-001) 1 点 名古屋城三の丸遺跡 I 図版15-1 上層の遺構(015-018) 1 点 第16 集 名古屋城三の丸遺跡 II 調査区上空より名古屋城(016-001) 1 点 名古屋城三の丸遺跡 II 図版9 上 II 期の遺構(016-012) 1 点 第44 集 名古屋城三の丸遺跡 IV 巻頭カラー 調査区全景(044-001) 1 点 名古屋城三の丸遺跡 IV 図版1 上面遺構(044-zuhan1) 1 点	8 点	2018/5/21
一宮市博物館	夏季イベント「博物館で夏祭り」に使用するため。		壺釣り道具一式	1 点	2018/5/29
豊田市郷土資料館	豊田市新博物館整備事業のPR のため「橋の下世界音楽隊」に出展するため。	朝日遺跡	銅鐸レプリカ 一式	1 点	2018/5/29
戎光祥出版株式会社	書籍『清須会議』(著者: 柴裕之)に掲載するため。	清洲城下町遺跡	第183集 清洲城下町遺跡 遺構写真 (183 - 02.jpg) 第99 集 清洲城下町遺跡 石垣の写真 (099 - 004.jpg) 第17 集 清洲城下町遺跡 土師器出土状況 (017-023.jpg) 第17 集 清洲城下町遺跡 噴砂写真 (017-S066.jpg)	4 点	2018/6/8
愛知県総務部	平成30 年度『県史連続講座』広報用チラシに利用するため。	下津宿遺跡	第175集 下津宿遺跡 墨書土器写真 (175-524.jpg) 土師器皿の写真 (175-930.jpg)	2 点	2018/6/15
愛知県総務部	『愛知県史 別編 文化財 5 工芸』に利用するため。	桑下城跡	第181集 桑下城跡出土 菊花双鶴鏡写真 (181-001.jpg)	1 点	2018/6/19
公益財団法人瀬戸市文化振興財団	企画展『瀬戸窯の復興－黎明期の江戸時代窯業－』に利用するため。	名古屋城三の丸遺跡 瓶子窯跡	第15 集 名古屋城三の丸遺跡I 遺跡遠景写真 (015-001.jpg) 第15 集 名古屋城三の丸遺跡I 遺構SK415 写真 (015-019.jpg) 第16 集 名古屋城三の丸遺跡II 遺跡遠景写真 (016-001.jpg) 第121 集 名古屋城三の丸遺跡VII 遺跡遠景写真 (127-001.jpg) 第121 集 名古屋城三の丸遺跡VII 遺構SX02 写真 (127-012.jpg) 第135 集 瓶子窯跡 遺物出土状況写真 (135-017.jpg0135-021.jpg)	7 点	2018/6/20
滝沢市埋蔵文化財センター	『遺物解説パネル』に利用するため。	勝川遺跡 志賀公園遺跡	第121 集 勝川遺跡 IV PL121-54 (121-54.pdf) 第 90 集 志賀公園遺跡 遺物写真 427 (090-071.jpg) 第 90 集 志賀公園遺跡 遺物写真 607 (090-086.jpg)	3 点	2018/6/22
蒲郡市博物館	企画展『アカヒコムラ・みかんの下の弥生時代』に利用するため。	諏訪遺跡 朝日遺跡 東光寺遺跡 八王子遺跡 猫島遺跡	第7 集 諏訪遺跡 遺構写真 4 点 第30 集 朝日遺跡 遺構写真 4 点 第42 集 東光寺遺跡 遺構写真 4 点 第92 集 八王子遺跡 遺構写真 1 点 第107 集 猫島遺跡 遺構写真 1 点	14 点	2018/8/24
鈴鹿市教育委員会	企画展『中世陶器の魅力－惟山の中世陶器part3 ー』に利用するため。	桑下東窯跡 上品野西金地遺跡 桜鐘古窯郡 夏敷古窯跡 蛇廻間古窯跡 鶯古窯跡	第164 集 桑下東窯跡 遺物写真 15 点30 カット 第173 集 上品野西金地遺跡 遺物写真 7 点22 カット 第153 集 桜鐘古窯郡 遺物写真 7 点 7 カット 第152 集 夏敷古窯跡 蛇廻間古窯跡 遺物写真 5 点 5 カット 第109 集 鶯古窯跡 遺物写真 4 点 8 カット	72 点	2018/10/5
知多メディアネットワーク株式会社 メディア事業部	テレビ番組『歴史はっけん! クイズ まちほれワンワン 卯ノ里小学校区編』に利用するため。	八巻古窯群	第202 集 八巻古窯群 掲載写真	14 点	2018/10/22
西尾市教育委員会	『新編西尾市史 資料編 1 考古』(平成31 年3 月刊行予定) に利用するため。	下山古墳 鳥羽城跡 西川原古墳	第6 集 下山古墳 掲載写真 2 点 第69 集 鳥羽城跡 掲載写真 5 点 第106 集 西川原古墳 掲載写真 4 点	11 点	2018/10/26
国立歴史民俗博物館	雑誌『延喜式研究』終刊に伴うネット公開に利用するため。	勝川遺跡	勝川遺跡出土 人形 昭和62 年度年報 49P 掲載 1 点 勝川遺跡出土 墨書土器 昭和62 年度年報 51P 掲載 1 点	2 点	2018/12/4
名古屋大学減災連携研究センター	名古屋大学減災館1F に展示利用するため。	清洲城下町遺跡	清洲城下町遺跡 天正地震における液状化痕跡の剥ぎ取り	1 点	2018/12/10
愛知県総務部	『愛知県史 通史編 4 近世 1』に利用するため。	名古屋城三の丸遺跡	名古屋城三の丸遺跡 焼塩壺写真 (161-247.jpg)	1 点	2018/12/21
設楽町議会	「したら議会だより 53 号」に利用するため。	滝瀬遺跡	滝瀬遺跡 発掘調査現地説明会時の写真	1 点	2019/1/17
豊橋市教育委員会	企画展「濠に囲まれた弥生時代のムラ」展に利用するため。	朝日遺跡	朝日遺跡 防衛施設復元図	1 点	2019/1/17

ホームページ

公開ファイル

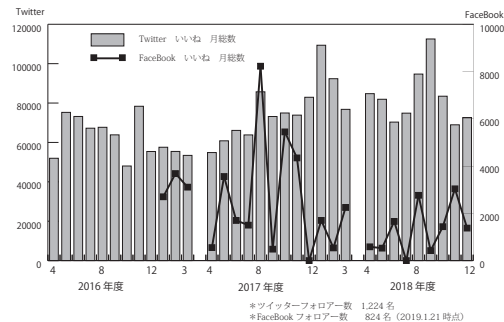
歴史講座などの資料PDFを追加。過去に刊行された年報について、一部PDF化を実施し公開。また、奈良文化財研究所が管理する「全国遺跡報告総覧」へも報告書PDFを登録した。

報告書PDF	260件
説明会資料	73件
年報PDF	402件
研究紀要PDF	179件
その他チラシ類	53件
設楽通信など広報誌	125件
歴史講座などの資料	19件
遺跡位置登録	260件
遺跡アルバム	41,483点
図書室公開データ	17,832点

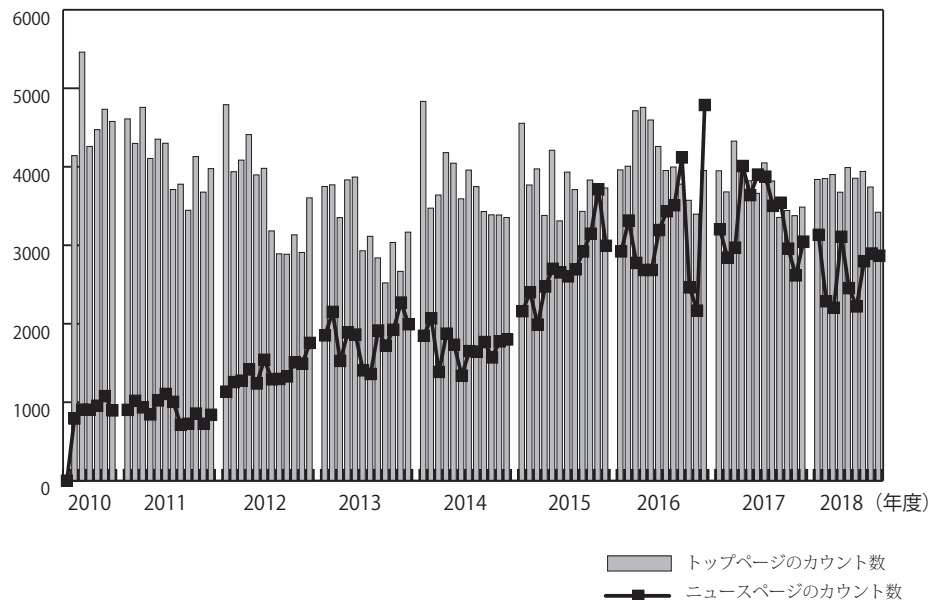
ホームページのアクセス数について

主要なトップページなどのアクセス数を見る。2010年10月にXoopsによるサイト構築以降の変化を示している。トップページのレイアウトをはじめ、構造的に大きな変更をしなかった期間となる。この期間を見ると、トップページのアクセス数は、2013年度に減少したが、その後3,000から4,000ヒットで横ばいを示している。一方、ニュースサイトに関しては2017年度をピークに増加と減少がみられた。これは、RSSの流行に連動しているものと推測する。このRSSの衰退に伴い、増加したのがSNSである。

そこで、当センターのTwitterとFaceBookの「いいね」のカウントの変化をみる。当センターのツイッターは、全職員の輪番によって文化財に関わる話題を日替わりで提供しているものである。また月によって、カウント数の変動はあるものの、概ね増加傾向がみられる。一方、フェイスブックはHPの更新情報を掲載しているが、更新回数に比例して数が減少している。現在のフォロワー数はツイッターが1,224名、フェイスブックが824名。2017年1月時点では、ツイッターのフォロワーが776名、フェイスブックが687名であった。



SNSのアクセス数の変化



トップページなどのアクセス数の変化

その他普及事業

家族の絆づくり事業「レッツ！発掘体験と温泉」

主催：(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団
共催：(株)旭高原、(有)ささゆり、中日新聞社
主管：愛知県旭高原少年自然の家
愛知県埋蔵文化財センター

後援：愛知県教育委員会 豊田市教育委員会
日時：平成30年10月27日(土)～28日(日)

1泊2日

対象：小学生以上の子供とその家族

参加者：13家族(41名)

事業全体は、愛知県旭高原少年自然の家が主管となつて実施されたものである。そのなかで、10月27日の発掘体験のみ、愛知県埋蔵文化財センターによる進行之した。内容は、以下の通りである。

開催場所：滝瀬遺跡18Ba区および休憩所内

13:00 はじめましての会
13:30 作業にあたっての説明など
14:00 滝瀬遺跡18Ba区での発掘体験
および出土遺物の拓本体験
16:00 終了

当日は、現場調査の発掘作業と、室内調査を代表して拓本作業を体験していただいた。参加者多数であったため、参加者全体を2グループに分け、交互にスケジュールを進めていった。

発掘体験では、遺跡から(土の中から)実際に土器・石器が出土することを感じてもらうことを目的とした。また、拓本作業では、資料化の工程の一端を体験してもらうことを目的とした。いずれも、本物の資料を用いた調査の中で行われることであり、楽しい中にも、考古学的見地に基づいた作業の必要性を、実体験してもらった。



レッツ！発掘体験と温泉
発掘体験メニュー 発掘体験

2018年10月27日
愛知県埋蔵文化財センター

外での発掘体験、楽しみです。
楽しく発掘体験するため、少しかけお約束をしましょう。

●発掘調査・・・

1. どの層から、建物のあと(遺構)や土器・石器など(遺物)が出るのか、確認します。
2. 土の中から、遺構や遺物を探し、さらに掘り出します。
3. 遺構の様子や、遺物の出土場所などの記録をとります。

今日は、2. 土の中から、遺構や遺物を探し、さらに掘り出します。を体験します。
※実際に、土の中から土器・石器が出土していることを感じてね。

●発掘体験での注意

1. 今、調査を行っている遺跡のなかに入ります。担当職員の指示をよく聞いて、掘ってね。
2. 掘り出した土器や石器は、掘り出したまま置いておきます。取り上げないでね。
3. 掘り出した土器や石器は、お持ち帰りできません。
4. 本物の遺跡での発掘です。土器・石器が出そうな場所を掘りますが、土器・石器がでない場合もあります。そのときはごめんなさい。

発掘の道具

移植ゴテ(手スコ) 手ガリ 手箕 竹串

鳳凰石剣片石残骸の出土地点
チェック袋の位置が鳳凰石。この日以前にもすでに10点ほど出土した。

手ガリや手スコで、少しずつ掘っていきます。
土器や石器が出てきたら、そのままにします。
その場所に竹串を刺して、わかるようにします。

◀当日配付資料(発掘作業用)

考古学にまつわるお話や、遺物についての説明は、事前に室内で行った。

事前説明の最後には、これから発掘作業に入る遺跡から実際に出土した遺物を、参加者全員に手に取って見てもらった。どのような遺物が出土するか、遺物を見つけたらどうすればいいのかなどについて、詳細にお話した。



発掘体験の様子

家族の体験活動推進事業「家族でヒ・ラ・メ・ク佐野遺跡」

趣旨：一宮総合運動場内に含まれる佐野遺跡（縄文時代）の土器・石器資料をもとに、昔の人たちの生活にふれながら、家族や仲間のコミュニケーションを図る場を提供する。

主催：（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団

主管：愛知県一宮総合運動場

後援：愛知県教育委員会 一宮市教育委員会

協力：一宮市博物館 愛知県埋蔵文化財センター

日程：9月29日（土）

会場：愛知県一宮総合運動場 会議室

対象者・参加人数：小学生とその家族・5家族19名

13:30 開会

◎佐野遺跡の解説

- ・佐野遺跡の土器・石器を手に取れる形で展示
- ・一宮市博物館学芸員 瀧はる香氏による遺跡解説

◎ヒラメク佐野遺跡

- ・出土資料の石器を観察して「つかいかた（用途）」を考える
- ・家族ごとに発表資料をまとめ、代表者が発表

◎石器の使用法の一例体験

- ・簡易あみものキットによるあんぎん体験

16:00 終了

*参加賞1：製作した作品および製作キット

*参加賞2：一宮市博物館

遺跡カードNo.89「佐野遺跡」

家族で一緒に行う研究発表とあんぎん体験は参加小学生を中心に進められ、興味深いひらめきが示された後では熱心に体験していただけた。当日は雨天であったため遺跡解説は屋内で行われたが、現地の佐野遺跡の存在を初めて知ったという参加者も多く、「遺物」を実際に手に取り観察したことなどは好評であった。遺跡見学会に体験を加えたことでより身近な文化財として紹介する機会となった。



佐野遺跡出土遺物（一宮市博物館蔵）



佐野遺跡の遺物観察



石器の使用法の考案



石器の使用法の発表



あんぎん体験

地元説明会・遺跡報告会

遺跡名	所在地	開催日	参加人数	
石原遺跡	設楽町川向	平成30年10月27日(土)	30名	地元説明会
滝瀬遺跡	設楽町八橋	平成30年11月10日(土)	30名	地元説明会
滝瀬遺跡	設楽町八橋	平成30年12月8日(土)	275名	現地説明会
一色青海遺跡	稲沢市平和町	平成31年1月19日(土)	73名	成果報告会 (於 メタウォーター下水道科学館あいち)
石原遺跡 滝瀬遺跡	設楽町川向 設楽町八橋	平成31年3月2日(土)	103名	成果報告会 (於 設楽町田口特産物振興センター)

報告書作成のための指導

遺跡名	指導日	指導者	所 属
川向東貝津遺跡	平成30年5月14日(月)	鈴木忠司	古代学協会
		神取龍生	幸田町教育委員会主査
	平成30年5月18日(金)	平井義敏	みよし市歴史民俗資料館主査
		白石浩之	愛知学院大学教授
		川合 剛	名古屋市博物館 調査研究員
		齋藤基生	名古屋学芸大学教授
	平成31年3月 6日(水)	増子康真	名古屋考古学会
	平成31年3月27日(水)	鈴木忠司	古代学協会
	平成31年3月29日(金)	白石浩之	愛知学院大学教授
		川合 剛	名古屋市博物館 調査研究員
		齋藤基生	名古屋学芸大学教授
		平井義敏	みよし市歴史民俗資料館主査
北山窯跡・勘介窯跡	平成30年9月11日(火)	山下峰司	瀬戸市健康福祉部健康課主幹
	平成31年2月19日(火)	藤澤良祐	愛知学院大学教授
		岡本直久	瀬戸市文化振興財団 埋蔵文化財センター所長
		松澤和人	瀬戸市文化振興財団 埋蔵文化財センター主任
北丹波・東流遺跡	平成30年11月20日(水)	尾野善裕	奈良文化財研究所都城発掘調査部 考古第二研究室室長
清洲城下町遺跡	平成31年 1月11日(金)	藤澤良祐	愛知学院大学教授
	平成31年 3月26日(火)	杵名貴彦	国立科学博物館理工学研究部 研究主幹

発掘調査における遺構・遺物などの指導

遺跡名	指導日	指導者	所 属
石原遺跡	平成31年 3月 2日(土)	白石浩之	愛知学院大学教授
滝瀬遺跡	平成30年10月23日(火)	増子康真	名古屋考古学会
	平成30年10月30日(火)	綿田弘実	長野県埋蔵文化財センター課長補佐
	平成30年11月 6日(火)	大塚達朗	南山大学教授

平成30年度 愛知県埋蔵文化財センター 組織一覧

運営協議会委員

稲葉伸道	名古屋大学名誉教授
加藤安信	元学校法人大同学園顧問
高妻洋成	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長
城ヶ谷和広	愛知県立昭和高等学校長
杉山春記	愛知県都市教育長協議会会長 安城市教育長
竹内 誠	名古屋大学大学院環境学研究科教授
玉山哲郎	愛知県教育委員会生涯学習スポーツ監
都築暢也	中京大学客員教授

専門委員

発掘調査	赤塚次郎	元愛知県埋蔵文化財センター職員
発掘調査	石黒立人	元愛知県埋蔵文化財センター職員
考古学	伊藤秋男	南山大学名誉教授
地理学	海津正倫	奈良大学教授
発掘調査	小澤一弘	元愛知県埋蔵文化財センター職員
保存科学	高妻洋成	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長
考古学	柴垣勇夫	元愛知淑徳大学教授
岩石学	諏訪兼位	名古屋大学名誉教授
形質人類学	多賀谷 昭	長野県看護大学特任教授・名誉教授
文献史学	福岡猛志	日本福祉大学名誉教授
考古学	藤澤良祐	愛知学院大学文学部教授
建築史学	麓 和善	名古屋工業大学大学院教授
発掘調査	松田 訓	元愛知県埋蔵文化財センター職員
木材組織学	吉田正人	名古屋大学准教授
考古学 動物学 植物学	渡辺 誠	名古屋大学名誉教授

センター長

松原邦夫

副センター長

宮腰健司

管理課

管理課長	鹿取健司
主 査	船橋孝彰
主 事	土居 恵
主 事	飯尾有里
主 事	村岡 香

調査課

調査課長	池本正明
主任専門員	酒井俊彦 鈴木正貴
調査研究専門員	樋上 昇 堀木真美子
	永井宏幸 鬼頭 剛
	武部真木 蔭山誠一
	川添和暁 永井邦仁
	早野浩二
調査研究主任	鈴木恵介
調査研究主事	田中 良

年報 平成30年度

平成31年3月

編集・発行 (公財) 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社
